

2025年度 チャペルサービスメッセージ集 —— For Others ——

第 44 号



フェリス女学院大学
キリスト教センター

平和を造る人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。

マタイによる福音書五章九節

目次

まえがき	学長	小檜山ルイ	4
キリスト教の憲法		金井 美彦	6
『ただ憧れを知る者だけが』		次郎丸智希	12
天の法則		松本奈穂子	16
「教会との関わり」		末松 茂敏	21
新しいぶどう酒は新しい革袋に		上條 直美	25
音楽の礼拝／父・子・聖霊		三浦はつみ	29
「ハンセン病差別を知っていますか？」		荒井 真	35
信仰義認を映像で表現する			
「『アララトの聖母』(アトム・エゴヤン監督、2003年)」		藤巻 光浩	41
ぶどう園のたとえが私たちに語りかけること		新倉 久乃	46
いちばん偉い人		川口 葉子	50
「見えないものに目を注ぐ」		饒平名尚子	54
神のなされることは皆その時になくなって美しい		秋岡 陽	58
クリスマス——キリストの二つの名前		相澤 一	62

闇から光が……………	谷口 昭弘	67
望んだとおりの人生に……………	松村はるか	72
イエス様とつながって生きるといふこと〜豊かに実るために〜……………	松田 理奈	76
「変える」といふこと……………	小檜山ルイ	81
「クリスマスのプレゼント」……………	関 智征	86
かれは／私は／あなたは（何を）……………	星野 薫	89
二〇二五年度 学内礼拝担当表……………	……………	96
あとがき……………	相澤 一	100

本書における聖書の日本語訳は、基本的に『聖書 聖書協会共同訳』（日本聖書協会）から引用されますが、執筆者の判断に基づいて異なる訳文が提示される場合があります。

まえがき

2025年度の「チャペルサービスマッセージ集——For Others——」をお届けします。フェリス女学院大学で毎日12時20分から20分間行われている礼拝で話されたことの一部が掲載されています。本年から、従来の「大学礼拝アンタハテン」をより分かりやすい名称に変更するとともに、従来の冊子のほかに、大学公式HPからもご覧いただける形といたしました。

「日に日に世界は悪くなる。気のせいかし、そうじゃない。」2025年9月から始まったNHKの朝の連続ドラマ「ばけばけ」の主題歌、「笑ったり、転んだり」——一度聞いたら、妙に耳に残ります。歌詞がVUCA時代の不安と生存戦略を見事に表現しているからでしょう。もうニュースを見たくなくなるほど、世界は混乱しています。日本の衰退は止めようがないように見えます。その不安の中、とにかく「諦めない、落ち込まない」で、「君と二人で散歩」しようというわけです。要するに、足元だけをとりあえず見て、生きて行くしかない。夢や希望や目標を語るものが、本当に難しい時代になりました。

そんな中、大学は、広い視野を持つことの大切さを主張し、世界平和の理想を掲げ続ける使命を負っています。それは、どうも時代の空気に合わない。でも、だからこそ、それは、空しいことではないと信じていることが今、必要になっています。

礼拝での語りは、その構造上、聖書の言葉との対話を必然的に含みます。ピューリタンの説教では、それが構造化されてきました。最初に聖書のテキストが示され、その説明があり、教理的命題（教え）を抽出し、その正しさを論証した上で、適用という特徴的な部分に至ります。この部分で、教えがその時の生活や状況の文脈において意味づけられるわけです。

大昔に記述された言葉が、現代においてどのような意味を持つかを考えてみる。いわば、この時、この場合を越えたスケールで今のことを考える切っ掛けを与えるのが礼拝での語りではないでしょうか。その意味で、大学が大切にしなければならないものだと思っています。

学長 小檜山 ルイ

キリスト教の憲法

マルコによる福音書 一二章二八―三四節

金 井 美 彦

(本学非常勤講師)

「キリスト教の憲法」マルコによる福音書12章28―34節

28 彼らの議論を聞いていた二人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」 29 イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。 30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』 31 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」 32 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。 33 そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れ

ています。」34 イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

ユダヤ教徒であったイエスにとって、イスラエルの「奴隷の国エジプト」からの解放は神の愛のしるしである。しかもそれは、この地上にあつて「自由」であることと一体である。さらに敷衍すれば、神の「愛」は、きわめて根本的であつて、私たち人間が存在していること、ここに生きてあること、創造された命としてあること、このこと自体が、愛の証であるといふところまで行く。それこそが、創世記1章に書かれていることである。すなわち天地万物の創造とは愛の実現である。この恵みとしての愛に被造物は報いねばならない。すなわち神を愛するのである。

イエスもまたユダヤ教徒として、創造の源である神を知り、要としての「愛の律法」の貴重さを知っていた。それゆえ、イエスは第一の掟として、申命記6章5節をひきつつ、このマルコ伝12章29節の言葉を告げたのである。

しかし、イエスはこの申命記の言葉では不十分であることも知っていた。なぜなら、神を愛せよと言いつつ、神の愛の実りとしての他者を差別し、互いに分断させていたからである。すなわち、口伝の「律法」や「神殿」といった宗教的伝統（慣習・法や制度）による恣意的な「支配」である。これはイエスから見れば神の支配ではなく、人間の迷惑の支配である。神を愛することを要求する一部の「宗教的人間」が、それをなし得ない人々を排除し、抑圧するという社会である。

もちろん、申命記には神を愛さないイスラエルは否定されるべきであるとする。ヤハウェへの愛を捨てるなら「滅ぼされる」のである。それは神の嫉妬であり、怒りである。それは戦争や飢饉、疫病といった災害として現れたが、それらはいたい、古代イスラエルの王国時代の預言者たちの時代の、王権の墮落、祭司たちの墮落、そして時に「預言者たち」自身の墮落に対する、神の審判なのであった。しかし、王国時代が終わり、律法と祭司が支配し導く時代（紀元前5世紀からのペルシア時代以降）になると、ユダヤ教は非常に閉鎖的になり、移ろいゆく世界の中でひとり屹立して生きていくことになった。やがてイエスの時代に至り、ローマ帝国の支配とヘレニズム文化が浸透する中、その生き方はより一層強固になった。そして勢い余つてと言うべきか、ユダヤ教内部での差別と抑圧が強まっていくのだが、それを律法の厳格化によって正当化した。それゆえ、本来自由で主体的であったはずの、あの出エジプトの共同体の理想は極端化し、頑固な律法主義者とローマにおもねる神殿貴族が支配する社会になった。他方、軍事的抵抗によってローマ支配から独立しようとする勢力もあった。一方、イエスはユダヤ教徒として律法の基本的有効性はわかっているが、何か欠けていることも知っていた。

そこで彼は、第一のものを尋ねられたのに、「第二のもの」を新たに付け加えた。それがレビ記19章18節の言葉であった。すなわち

第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。隣人とは誰かという問いには、マルコ伝は答えていないし、そもそもその問いはここに出てこな

いが、ルカ伝はこのイエスの答えを「善きサマリア人」のエピソード（ルカ伝10章25節以下）に入れて、明確な回答を提示した。マルコ伝は、律法学者のまともな対応に満足するイエスを描くだけである。ともあれ、「隣人を愛する」ということがどうして神への愛と併存するのが問われなければならない。

では、隣人とは誰か？それはイスラエルでは「同胞」である。同胞なら、同じイスラエルの伝統の内にあり、同じ律法を受け継いできたはずだから、細かい律法違反をあげつらうのは止めて、「同胞」として互いに愛し合うべきだということになる。しかし、イエスは単に「隣人」と言っており、この語の外延は広い。彼は同胞を念頭に置いておらず、ルカが解説したように、同胞を越えた、あらゆる人間のことも含めない。とはいえ、なぜ同胞を越えられるのか？ユダヤの歴史を共有しない者、すなわち律法を共有しない者に何を言っても無意味ではないか。

しかし、イエスのこれまでの行動から言えるのは、彼がユダヤ人だけに到来した預言者あるいはメシア（救い主）ではないということである。イエスはユダヤの律法の枠を超え、異邦人も含めすべての人間の解放を宣言したのであった。それは人種や身分や民族の違いにとどまらず、個人々の境遇（病や障がい）にまで及んでいた。しかも、その解放には順序があり、この世にあって最も厳しいところから始まっていたのである（具体的にはハンセン病患者、精神を病んだ人々〔例えば墓場で暮らす悪霊に憑かれた者〕）。これはエジプトで奴隷として抑圧されたイスラエルの人々から「解放」が始まったというのと同じ構図である。

それではイエスはモーセの反復であろうか。そうではない。イエスはモーセにおいて限定された民、つまり神に「選ばれた者たち」としてのイスラエルという考え方を乗り越えようとしたのである。隣人とは結局、すべての人間であり、そこには未来の人間さえ含むのである。その証拠に、例えば彼はまず「子ども」を優先した（マルコ伝9章33節以下、および10章13節以下のエピソード参照）。これは言い換えれば「未来の人間」を真つ先に「隣人とした」と言つてよい。隣人とは自分の周りの、そして自分の未来、すなわち自分の後の世代も含む、あらゆる人間である。しかしなぜ愛せるのか。それは簡単である。すでに述べたように、私たち一人ひとりはずべてかけがえのない、神の創造の賜物であるからだ。この根本的理解は、残念ながら大人になるにつれ、意識から遠のいてしまうが、病になり、老いるにつれて改めて気づきはじめる。時に、わたしたちは誕生と死を思うとき、あるいはこれらに直（じか）に接するとき、たいがい謙虚になる。その謙虚さを手掛かりに、いかなる隣人たちも弱く憐れまれるべき独りの人間であり、私と変わらぬ足らぬ者、欠け多き者であることに気付く（つまり人はあまねく罪人であり、滅びゆく人間である）。それゆえ、彼らが（そしてもちろんおのれ自身も）神の愛の目的であるなら、その愛の目的を（そしておのれ自身を）この私が愛するのは当然である。イエスはそれゆえ、レビ記19章18節（復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である）の後半を加えた。旧約聖書のレビ記19章は実は律法の要約として存在する。そしてイエスはそのことを前提に、律法学者に向かって語つたのだ。そしてこの二つの文言は、結局、キ

リスト教倫理の根幹というべき、すなわち単に人間として生きるというのではなく、人間として「善く生きる」ための決定的な原則となったのである。

付記 筆者は2025年度をもって本学の講師を辞することとしました。この10年余の

間、折に触れてチャペルの講壇に立ち、学生や教職員の皆さんに聖書からのメッセージを語る機会が与えられたことに深く感謝いたします。

(二〇二五年五月一日 緑園)

『ただ憧れを知る者だけが』

詩篇 一〇〇編

次郎丸 智 希

(グローバル教養学部文化表現学科准教授)

Sehnsucht というドイツ語があります。これは「あこがれ」という意味で、ドイツロマン派にとって重要なキーワードです。Sehn は見る、sucht は探すという意味で、文字通り探すように世界を見ることやがて「あこがれ」につながりました。タイトル「ただ憧れを知る者だけが」は、ドイツの文豪ゲーテの書いた詩のタイトルです。シューベルトやシューマン、チャイコフスキーなど名だたる大作曲家たちが、この詩に曲をつけました。この詩はこのように歌われます。「ただ憧れを知る者だけが、この苦しみを知ってくれます。ただひとり、すべての喜びから引き離されて、私は空の彼方を見つめます。あの彼方に、私を愛してくれる人があるのです。めまいがします。私の心も体も燃えています。ただ憧れを知る者だけが、私の苦しみを知ってくれます」ただひたすらに、彼方の愛しい存在に焦がれて、身も心も焼き尽くす激しい憧れに満ちた詩です。

この詩は、ゲーテの長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中に出てくる、ミニョ

ンという少女によって歌われます。彼女はさるイタリアの公爵の家にひっそりと生まれた隠し子でしたが、ある日誘拐され、峰々を超えて遠くドイツの国でサーカスに売られてしまったのです。そこで彼女は芸を仕込まれ、団長に虐待される日々を送っていました。そこに、演劇修行の旅に出ていた青年ヴィルヘルムがあらわれ、彼女を引き取ってくれたのです。ミニオンはヴィルヘルムを恋人とも父親とも思い、慕い、行動を共にするようになります。異国で孤独に人知れず生きてきた彼女は、遠く離れた故郷をひたすらあこがれて、日々を過ごしてきたのでしょう。不思議な魅力を持たえた彼女は、作者ゲーテにとってもお気に入りのキャラクターだったようで、主人公よりもその描写が詳細なほどです。

この小説は後世に大きな影響を与え、教養小説と呼ばれるジャンルの元祖となりました。中でもこのミニオンは多くの芸術家に靈感を与えました。ロマン派の動向があらわれる19世紀の初めは、ヨーロッパではフランス革命と、その後のナポレオンの混乱が収束に向かい、一見平和だけでも窮屈な時代が訪れた時期でもありました。ドイツではビーターマイアーと呼ばれる時代になります。ビーターマイアーとは、小市民的な人物の典型的な名前です。二度と革命やナポレオンのような事態が起こらないように、国側は言論や集会の制限をかけるようになりました。シュベルトを囲むシューベルタイアーデという集まりが有名ではありますが、それは彼の曲を愛好する単なる文化サロンというだけではありません。革命後の毒気を抜かれてしまった時代に、熱い思いを持った若者たちが、自分たちの芸術の力を高め合い確かめ合う場でもあったのです。シュー

ベルトの口癖は「カネヴァス？彼に何ができる？」というものでした。そしてそんな集会も当局から目をつけられており、シューベルトも革命詩人だった友人にまきこまれて一度逮捕されていることがあります。『野ばら』や『菩提樹』などの美しいドイツ歌曲を作った歌曲王というイメージしかない人にとってはびっくりされるかもしれませんが、それほど芸術というのは彼らにとって生きる糧であり、自分の存在を発信する武器だったので。

窮屈な鬱屈した現状から飛翔し、ここではないどこかへ憧れ、自由の歌の翼で飛びだっていく思いが、ロマン派の彼らの原動力となりました。彼らはただいたずらに夢想することにかまけていたわけがありません。行き詰まる空気を抜け出し、自由を求めずにはいられない、このような切迫した事情が、彼らをしてあの切実な、抒情と彼方を思う歌を生み出したのでした。それがすなわち Sehnsucht 憧れです。しかしひとたびその翼を手に入れた際、人は汲めども尽きない焦がれにさいなまれていく。それはまさに、その憧れを知ったものにしか理解できない苦しみであることでしよう。けれどもその燃えるような命の日々こそが、その人を輝かせ、その人にしかない豊かな人生を歩ませることでしょう。今日お読みした聖書の箇所は、詩篇100編です。「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え喜び歌って御前に進み出よ。」高く天におられる父に向って、ただひたすらに祈りと歓喜と感謝をささげる歌は、まさにあこがれに満ちています。ゲーテが小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』で創り出したもう一人のキャラクターに「豎琴弾き」があります。彼は実はミニヨンの父親なのですが、二人は最後までそれを知ること

ありません。豎琴弾きは自分の数奇な運命と業をひとり背負い、この世の憂いを歌います。彼が具現しているのは「孤独」です。孤独の暗闇に吸い込まれるように、彼はさまよいをやめません。ゲートルはここでミニヨンという「憧れ」と豎琴弾きという「孤独」が親子という設定で描いており、これは大変象徴的なものです。人は孤独であることを免れません。だからこそ憧れることをやめないのです。しかし孤独にとらわれている人は、憧れを知る者に気づくことができせん。ちょうど豎琴弾きがミニヨンを実の娘だとわからなかつたように。私たちの周りには日々、神々の光が等しく注がれています。けれどもそれは、求めない者には気づけない、何故ならそれは苦しみをともなう憧れだからです。なかなか答えの見えない祈りだからです。常にあこがれ続けることに心身疲れることがあつても、いつかふつふつと心はよみがえる。そのような人間の営みを、信仰はあるいは芸術は、支えているのではないのでしょうか？ミニヨンは「君よ知るや南の国」という詩の中で、このように言います。「あなたは知っていますか、レモンの花咲く南の国を、暗い葉陰に金色のオレンジ実り、青い空にやわらかな風が吹き、ミルテは静かに、月桂樹は高くそびえるあの国を、(略)そこへ、そこへ私たちの道は続いています、父よ、行きましょう！」と。日々新しい世界へのあこがれを宿して生きることが、私たちを明日に進ませていくでしょう。孤独の闇とあこがれの光を行き来しつつ、私たちは日々、降り注ぐ神の栄光に立ち戻りゆきます。

天の法則

ヨブ記 三十八章 二二～三〇、三三～三五節

松 本 奈穂子

(本学非常勤講師)

非常勤講師の松本です。フェリス女学院では2012年より「英語で学ぶグリーン経済」を担当しています。

今年は2025年ですが、ちょうど10年前の2015年は、世界の環境政策においてとても重要な年でした。2つの歴史的な国際的合意がなされたからです。2015年9月には、国連持続可能な開発サミットで、17の目標と169のターゲットからなる「SDGs（持続可能な開発目標）」が採択されました。続いて12月の国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）では気候変動に関する「パリ協定」が採択されました。

パリ協定の目標は、世界全体の平均気温の上昇を産業革命前と比較して2度より十分低く保ち、できれば1.5度に抑えることです。その目標を達成するため、2020年以降の温室効果ガス削減に関する世界的な取り決めが示されました。また、SDGsの目標13には「気候変動に具体的な対

策を」が盛り込まれており、この年を機に世界の気候変動対策の取り組みが加速しました。

それから10年経ったわけですが、世界の気候変動対策の進捗状況はどのようになっていてでしょうか。パリ協定を受けて、世界各国が温室効果ガス削減目標を設定し、目標を達成するための対策を実施しています。ところが、気候変動枠組条約事務局の分析によると、現状の努力だけでは2100年時点の気温上昇は2.1から2.8度になってしまうと予測されています。つまり、気温上昇をできれば1.5度以内に抑えようという世界全体の目標を達成するためには、各国がさらに削減努力をしなければいけないという状況なのです。ところが、アメリカのトランプ大統領は、今年1月の就任早々にパリ協定から離脱すると大統領令に署名しました。つまり、世界の気候変動対策は、各国が排出削減にもっと取り組む必要がある中で、温室効果ガス排出量世界第2位の大国アメリカが協力枠組みから抜けてしまうという困難な状況にあるのです。

どうして気候変動対策の国際協力はこんなにも難しいのでしょうか。様々な原因が考えられますが、一つは気候システムの複雑性にあるといえるでしょう。気候変動は、自然要因（太陽活動、火山活動、海洋循環等）と人為要因（エネルギー消費等からの温室効果ガスの排出等）が複雑に絡み合って起こります。このため、気候変動の原因を特定して対策を行う上で科学的な合意形成が難しく、対策の実施に遅れが生じることがあります。例えば、特定の地域での異常気象が気候変動によるものなのか、あるいは自然の変動によるものなのかを判断するのは、科学的に困難な場合もあります。

現代は、科学の進歩のおかげで短期間の気象メカニズムについては予測の精度が向上しており、私たちは日々かなり正確な気象予報を得て生活に活かすことができています。一方、本日の聖句の記載されているヨブ記の時代ですと、いつ雨がふるかは、それぞれが空をよく観察して予想するしかありませんでした。では、科学の力で長期間にわたる気候システムを完全に解析して、気候変動を制御することができる日がくるのでしょうか。

「聖書とエコロジー」という本の著者、リチャード・ボウカム氏は、「人間がいつの日にかあらゆることを理解できるようになると想定する根拠は全くない」と述べています。人間の知性ではそもそも越えられない知識の限界があるということです。

気候メカニズムの複雑さや人の理解の及ばない点については、実は聖書にも詳しく書かれています。ヨブ記の38章には、たくさんの気象に関する表現があります。22節から30節をご覧ください。雪、霰、風、雨、稲妻、露、霜、氷等、気象現象が具体的に描かれています。これらの現象は、現在世界中で観測されている異常気象とかなり一致しているように思えます。

ここで、ヨブ記について簡単に説明します。ヨブというのは人の名前で、神様を愛する正しい人でした。ヨブ記のストーリーは、ヨブの神様への愛を試そうとして、悪魔がヨブを色々な災難にあわせるところから始まります。この38章は、災難にあつて神様を疑い始めたヨブに神様が語りかけられた内容が記されています。長い長い神様の語りかけを簡単に要約しますと、「人は誰も、神様のなさることとその理由を完全に理解することはできない」ということです。

33節から35節を読みましょう。天の法則を知りその支配を地上に及ぼす者は、人間ではなくて神様おひとりであることが、力強く語られています。

では、神様の御業を完全に理解できない私たち人間に必要な態度はどのようなものでしょうか。ボウカム氏はこう言っています。「この地球上をもっと遠慮して歩き、周囲の生命に対してもっと敬意を払う謙虚さが必要だ」と。技術はもちろん素晴らしい面もあります。しかし私たちの周囲の問題をすべて解決してくれるわけではありませんし、技術開発には想定外のリスクを伴うことがあります。

人類が、気象・気候を含めすべての事象をコントロールすることのできる神様の前で謙虚に歩み、この地球の周囲の生物に敬意を払いつつ、将来世代に美しい地球を引き継いでいけることを心から願ひ祈ります。

祈り

愛する天の神様、お名前を讃美します。あなたは天の法則をすべてご存知で、世界の全てを治めておられます。私たち人間はあなたに知恵を与えて頂き、文化や経済を発展させてきましたが、同時に様々な問題を引き起こしてきました。今気候変動という大きな問題に直面する中で、あなたの前に謙虚に歩むことができますように。

この小さき祈り、愛する主イエス・キリスト様のお名前でお捧げ致します。
アーメン

引用文献 「聖書とエコロジー 創られたものすべての共同体を再発見する」

リチャード・ボウカム著 山口希生訳 いのちのことは社 2022年

(二〇二五年六月二〇日 緑園)

「教会との関わり」

ローマの信徒への手紙 一二章一二節

末松 茂敏

(本学非常勤講師)

教会との関わりについて書かせて頂きます。

まず自己紹介を致します。私は2000年からフェリス女学院大学でピアノとソルフェージュを教えています。又、教職の聴音・音楽理論も担当しています。ソルフェージュの授業では歌ったり、ピアノで弾いた旋律を書きとってもらったりしています。

それでは教会との関わりについてですが、2歳から5歳まで私は栃木県の鹿沼市に住んでいました。5歳の頃、鹿沼教会の行事で姉がリコーダー、兄がハーモニカ、私は鈴を持って演奏しました。この鹿沼教会の牧師は高崎隆先生でした。奥様は高崎道子先生、歯医者で、私は歯を見て頂きました。とても暖かいご夫妻です。

その後、5歳から中学2年生まで岡山県倉敷市に住んでいました。小学1年生の時、母に連れられて倉敷市にある笹沖教会の日曜学校に行きました。母はフェリス女学院の卒業生で音楽を学

びました。日曜学校では、友松先生ご夫妻に教えて頂き、讃美歌を歌ったり、聖書を読んだり、クリスマスにはイエス様誕生の劇をしました。私は讃美歌を歌うのが大好きでした。又、讃美歌の伴奏をオルガンで弾いて下さい。とよく言われ弾きました。先ほど歌った讃美歌21 493番「いつくしみ深い」は、日曜学校で毎週歌っていた讃美歌です。また、日曜学校のその日に聖書で読んだ中の一節を指定されて、次の日曜学校の時、暗記で言うのを5週連続してすると、当時、笹沖教会にスウェーデンから来られていたクリスチャンソン牧師から外国の切手をセツトにして頂きました。またある時、自分の好きな聖書の言葉を書いて下さい。と言われ、新約聖書の「ローマ人への手紙」の第12章21節の「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」の言葉を選びしおりに書きました。小学4年生の時です。母は倉敷で洗礼を受けました。

中学2年生まで岡山県にいましたが、中学3年生で以前、住んでいた栃木県鹿沼市に引っ越ししました。鹿沼教会の高崎隆先生と道子先生に再会した時、鹿沼に帰ってきたという気持ちになりました。鹿沼教会のクリスマス礼拝で、中学3年生の時、バッハの平均律を1曲弾かせて頂きました。

その後、高校、大学と進み、大学院1年生の6月にドイツのハンブルクに行き、ハンブルク音楽演劇大学に留学しました。大学のすぐ近くに教会があり、日曜の朝10時だったと思います。鐘がきれいによく鳴り響いていました。ハンブルクでの礼拝で二回ほど讃美歌の伴奏をしました。留学中から聖書を毎日1章ずつ読むようになりました。

1996年7月に日本に帰国し、その年に鹿沼教会の高崎先生からご連絡を頂き、12月のクリスマスコンサートで演奏してもらえますか。と声をかけて下さり、それから2018年まで20年以上クリスマスコンサートで演奏しました。

2008年からは鹿沼出身のヴァイオリニスト、鶴野絃之さんともクリスマスコンサートで共演しました。又、鹿沼混声合唱団もこのコンサートに毎回出演していましたが、自分の演奏が終わり、ほっとして合唱団を聴くのは幸せな時間でした。鹿沼教会でのコンサートの時は、いつも高崎隆牧師のところにお泊りさせて頂きました。奥様の道子先生が私に、教会生活があると良いのではとおっしゃられ、家の近くの町田市の成瀬教会に行ったのが1997年1月でした。成瀬教会では、この頃、香月茂先生が牧師をされていて、私を暖かく迎えて下さいました。またオルガン奏者の湯浅照子さんが「神様をドイツ語でGottと言いますが、ト長調はドイツ語でGurと言い、頭文字が同じGで、神様とト長調は関係がある。」とおっしゃいました。「主よ、人の望みのよるこびよ」もト長調、Gurで書かれています。

成瀬教会にはその後、数回礼拝や、イースター、コンサートを聴きに参加しました。私の祖母と母は成瀬教会に通っていました。そして私も成瀬教会でホルンの宮田四郎さんやソプラノの寺島夕紗子さんとクリスマスコンサートで共演させて頂きました。

私の祖母はクリスマスチャンで9年前に亡くなったのですが讚美歌21 484番「主われを愛す」が好きな讚美歌でした。5年前に母が亡くなったのですが、母が通っていた成瀬教会に父が行くよ

うになり、私も都合の良い時、成瀬教会の礼拝に参加しました。

そして3年前に父が洗礼を受けました。私は礼拝での奏楽を頼まれ、弾かせて頂くことになりました。洗礼については二年前のイースターの頃から考えていました。二年前の12月に寺島夕紗子さんと成瀬教会のクリスマスコンサートで演奏させて頂きましたが、このコンサートの本番の演奏中に、十字架の方から「洗礼を受けなさい。」という言葉が聴こえてきました。そして二か月後、牧師の平尚紀先生に洗礼を受けたいと思っていることをお伝えし、洗礼に向けて、平先生と聖書を読んだりしながら準備していき、昨年4月20日のイースターの日に洗礼を受けました。

洗礼を受けた4月に、バッハのマタイ受難曲を聴きに行きましたが、群衆がイエス様に対して激しい言葉を言っているのを聴き、心を痛め、逆にアルトのソロがイエス様に対して優しい言葉で歌っているのを感じました。それまでに三度、マタイ受難曲を聴いていましたが、このような気持ちになったのは初めてでした。今まで教会や聖書を大切に思ってきましたが、洗礼を受けて益々その思いは強くなっています。

(二〇二五年六月三〇日 緑園)

新しいぶどう酒は新しい革袋に

ルカによる福音書五章三六節～三八節

上 條 直 美

(ボランティアセンター職員)

イエスは現代の人権活動家

ルカ5章には、伝道をはじめたイエスの言葉によって新しい信仰を得て、回心する人々のエピソードが書かれています。「人間をとる漁師になりなさい」と言われた漁師たち、皮膚病や中風(ちゅうぶ)の病人、徴税人という「いやしい」職業についていたレビたちを悔い改めさせて弟子にしました。そして、ファリサイ派の人々からなぜ弟子たちを断食させずに、飲み食いを許しているのか、と問われたときの返事が、今日の聖書の箇所です。「新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりしない」という言葉です。

古い慣習では、信仰のあかし、悔い改めのあかしとして断食を行っていたそうです。イエスは断食を絶対的な信仰のあかしとは考えず、ご自身は断食を行いましたが、弟子たちにそれを強要

することはありませんでした。

また、それまで忌み嫌われていた、これまで疎外されていた徴税人や罪人、病人の人に寄り添い、一緒に食事をしたり、病気を癒したりすることも、古い慣習の考え方とは違いました。現代でいうところの社会的弱者や人権を尊重されていない人にこそ寄り添う、その人の尊厳を守るあり方に通じるお話だと思えます。イエスが従来の慣習に従っていない、と批判する人がいたようです。新しい考えは、常に古い考えを「否定している」と思われがちなため、相手に不快な思いを抱かせることが往々にしてあります。

新しい考えが、自分以外の誰かの「得」になることだと、心のどこかで妬ましい気持ちになるか、自分に直接関係のないこととして、愛の反対の無関心になります。

神の真理に触れ魂を新しくされるために

そもそも神の真理に触れて魂を新しくされるという体験は、偶然起こった出来事を通して経験することもあるかもしれませんが、私は日々のふりかえりの積み重ねの上に成り立っていると感じています。それまで当たり前と思っていた自分の固定概念を問い直したり、自分自身が感じる「気持ち」を手がかりに、なぜそのように感じるのか、その奥にある自分自身の態度や姿勢、ものごとへの向き合い方を知ることによって、そしてイエスの生き方に照らし合わせて、新しい自分を獲得

していくことがある、そんなふうに思います。

3人の師との出会い

私は20代で3人の尊敬する人と出会いました。この出会いは一生続く恵みだと感じています。一人は、アジア学院という栃木県那須塩原にある国際協力団体を創立された高見敏弘さんという方です。二人目は韓国の農村で「平民のための学校」（韓国名ではブルム学校）を作り、校長先生をしていた洪淳明先生です。三人目は日本で最初に有機農業を始めた一人と言われる埼玉県の有機農家の金子美登さんです。

いずれの方も土に根差し、三愛（土を愛し、人を愛し、神を愛す）精神に基づいて、農業を通じて社会のために尽くした方々です。私が3人に共通すると感じていることは、まさに「新しいぶどう酒を新しい革袋に入れる」人という点です。自分の私利私欲を超えて、人々のために、社会のためによいと思われる新しい考えを実現するために新しい革袋を準備しなさいと説いたイエスキリストの姿を見出すことができます。3人がそれぞれ作った学校やコミュニティはとても小さい規模のものですが、自然と人間が共存し、人と人とが共生するために必要なものがたくさんあります。

アジア学院では、キリスト教センターとボランティアセンターが共催して毎年1泊2日のスタディツアーを行っています。持続可能なライフスタイルの実体験がそこできます。アジア学院で

はアジア・アフリカ・中南米・太平洋諸国の農村指導者が約9か月間滞在し、コミュニティリーダー研修を行なっています。文化・信仰の多様性があり、食料に関してはほぼ自給に近く、小さなコミュニティですが設立された1973年から数えると1200名を超える世界中にいる卒業生とつながっています。多様な人がいればさまざまな葛藤も起こりますが、それも含めて連続と続く活動から学ぶことが大きいと感じています。共催でこのような学びの場が作れることは幸いです。

3人に共通して印象深かったのは、初対面の人に対しても、古いともだちのように親しく接してくれて、お会いするたびにいつも励ましの言葉をくれたことです。

聖書では、新しいぶどう酒(考え方、習慣)は、新しい革袋(入れ物、システム)に入れなければならぬ、私たちはちゃんと新しい革袋を用意しなければなりません。平和、人権の考え方はどんどん新しくなっています。アップデートが追い付かないことがたくさんあります。社会的弱者に寄り添うことは、イエスの時代には新しかったかもしれないかもしれませんが、今の時代では考え方としては新しいことではありません。それなのに、私たちは新しい革袋をいまだに十分に用意できていないと言えません。

イエスキリストを通した神の教えは、すべての人、ひとりひとりを大切にするというシンプルなメッセージです。私たちは常に新しい革袋の準備を怠らないように生活していきたいものです。

(二〇二五年七月一六日 緑園)

音楽の礼拝

創世記 二章七節

三浦 はつみ

(本学非常勤講師)

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きるものとなった」

少しだけお話しさせていただきます。

「私たちは土から作られたのだから、死んだら土に帰る」ということは、今日の聖書の箇所を読むと、とても納得がいきます。土で作られた人間は、神さまの息によつて生きたものとなりました。つまり「私たちの息は、神さまの息」ということです。ですから、その息を使つて賛美をすることは、神さまが最も喜ばれることではないかと私は考えます。

フェリス女学院大学には大小合わせて6台のパイプオルガンがあり、礼拝やレッスン、コンサー

トで大活躍をしています。パイプオルガンは、フイゴによって送られた空気を、パイプ、つまり「笛」に通して音を出す楽器です。フイゴは、ちょうど私たちの体の「肺」のような役目をしていて、オルガンは私たちと同じ空気を吸って音を出してくれているのです。何百年もの間、パイプオルガンが、教会で賛美の声を支えてきたのは、人間が吸うのと同じ空気で音を出す楽器だということも理由の一つではないかと、私は思っています。

今日の前奏は私の友人の作曲家、坂本日菜さんという人が作曲した「7つの贈り物」という曲でした。そして後奏は、大バツハが作曲した「来れ、創り主なる聖霊よ」というコラール前奏曲で、どちらも讚美歌21の第339番「来たれ聖霊よ」がもとになっています。2週間ほど前、この聖書台の布の色が「赤」だったことを覚えている人はいますか？「赤」は「聖霊降臨日 ペンテコステ」の期節に用いられる色、そしてこの讚美歌339番は、その聖霊降臨日に歌われる有名なグレゴリオ聖歌から作られたものです。どうぞ、今日は讚美歌の歌詞を見ながら後奏を聞いてください。

ヨハネの福音書の中に「イエスは弟子たちに息を吹きかけ、『聖霊を受けなさい』と言った」という箇所があります。イエスさまの息が聖霊を呼ぶものならば、土から人間を造られた神さまの息がそうでないはずがありません。聖霊は私たちが生まれた時にはもうすでに私たちの中にあつて、「いまかいまか」と働き出すのを待っているのではないのでしょうか？ 神さまの息が、そして聖霊

が私たちにどんな働きをさせたいと思っているのか、どうぞ心を傾けてみてください。

お祈りします。

天の父なる神さま、どうぞこの学校に集う一人一人の上に、聖霊を豊かに注いでください。そして今日一日、あなたの御心になう働きができますようお導きください。主イエス・キリストの御名によって、み前にお捧げいたします。アーメン

(二〇二五年六月二六日 緑園)

父・子・聖霊

ヨハネによる福音書 二〇章一九～二二節

三 浦 はつみ

(本学非常勤講師)

今読んでいただいた聖書の箇所は、キリストが十字架に架けられて亡くなった3日後、復活されて弟子たちにお会いになった時の出来事が書かれています。弟子たちに見せられた手は、十字架につけられた時の釘で打たれた痕、脇腹は「本当に死んだかどうか」を確かめるために、兵士が槍で刺した傷痕のことです。

その後の箇所「父が私をおつかわしになった」とあり、ここにキリストの父である「神」と、「わたし」とご自分自身を呼んでいる「御子イエス・キリスト」が出てきます。そしてその後に「彼らに息を吹きかけて言われた『聖霊を受けなさい』」とあり、「聖霊」も出てきます。

キリスト教には「父なる神」、「御子イエス・キリスト」そして「聖霊」、この3つが同一の神であるという考え方があります。とてもわかりにくですが、旧約聖書の時代、人々を導くものは預言者たちを通して届けられた「神」の言葉でした。そして新約聖書の時代、キリストが人間としてこ

の世に來られた時、人々を導くのはもちろん「キリスト」でした。そしてキリストが天に昇られた後、私たちを導いてくれるものが「聖霊」と考えるとわかりやすいと、ある礼拝説教の中で聞いたことがあります。

この「三位一体」にこだわった作曲家の一人に、「ドイツ3大B」の最初に並べられる「バッハ」がいます。バッハは転職の多い人生でしたが、生涯の多くの時間を「教会音楽家」として過ごし、最後はライプツィヒの聖トーマス教会の音楽監督としてその生涯を閉じました。

今日前奏で演奏した曲は、バッハの「前奏曲イ長調」でしたが、イ長調というのはシャープ3つの調性です。「3」という数字は「三位一体」を表す重要な数字で、これから後奏で演奏する「フーガ 変ホ長調」は、調号がフラット3つ、そしてフーガのテーマも3種類というこだわりようです。フーガは最初に出てきたメロディが、次々と色々な声部に現れていく曲のことで、この曲では、1つ目のテーマは「父なる神」を象徴する荘厳なメロディ、そして2つ目は揺らぎのあるテーマですが、これは「キリスト」を承知しており、キリストが私たちに語りかける言葉のような表情を持っています。そして3つ目は、風や炎のような形で現れたという「聖霊」を象徴する動きのあるメロディになっています。そして2つ目と3つ目のテーマと一緒に、必ず最初の「父なる神」を表すメロディも出てきます。そしてこのメロディにはドイツ音名のEs (ミb) D (レ) G (ソ) が使われていて、それはラテン語の「Solī Deo Gloria 神にのみ栄光あれ」という意味が隠されています。それ

はバッハが自身の作品の中に刻印した信仰告白でもあります。バッハの思いを想像しながら後奏を聞いてみてください。

お祈りします。

天の父なる神さま、私たちがキリストの語られた言葉に心を向け、今日もあなたのみこころにかなう働きができますように聖霊を豊かにお送りください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によってお捧げいたします。アーメン。

(二〇二五年七月一七日 緑園)

「ハンセン病差別を知っていますか？」

マルコによる福音書 一章四〇～四二節

荒井 真

(グローバル教養学部国際社会学科教授)

讃美歌16 (1-3) (4-5)

先程お読みした最新版である、聖書協会共同訳聖書の箇所には「規定の病」という言葉が出てきます。さて「規定の病」とは何なのでしょう。一つ前の新共同訳聖書の同じ箇所には、「重い皮膚病」と記されています。この言葉は、ギリシア語の「レブラ」の訳であり、ヘブライ語では「ツアラト」と呼ばれていたものです。最近になるまでキリスト教会は、「レブラ」や「ツアラト」とは「ハンセン病」(らい病)を意味すると解釈してきましたが、旧約聖書の時代にハンセン病が存在したか否かが分からないこと、旧約聖書に規定されている病の症状が、必ずしもハンセン病と一致しないこと、さらには、この聖書の言葉によりハンセン病の患者に対する苛酷な差別が行われてきたことを踏まえて、1997年から「らい病」を「重い皮膚病」に変え、2018年から出版

されている聖書協会共同訳聖書では「規定の病」と訳すことになったのです。

人類は病気にまつわる多くの差別を行ってきましたが、今日は「ハンセン病」差別について考えてみたいと思います。

ハンセン病とは、「らい菌」によって皮膚と末梢神経が侵される病気です。大変古くから存在する病気で、今から4000年前(紀元前2000年頃)にはすでに、エジプト、中国、インドの古文書に記されています。日本でも「日本書紀」にこの病気の記述があるそうです。治療薬のなかった時代には、顔や手足に皮膚の発疹ができたり、熱さや痛みを感じなくなったり、顔・手・足の形が激変することから恐れられてきましたが、1941年に特效薬が発見され、完治する病気となりました。早期治療を行えば、体の変形も起こりません。らい菌自体、とても感染力が弱く、現在の日本では、年に0〜3人が発症するだけとなっています。したがって、現在の日本ではまったく怖くない病気です。

しかし以前は、病気により容貌や手足の形が変わるため、世界中で激しい差別の対象となっていました。

日本では、1907年に「癩予防に関する件」という法律が制定されました。この法律は、放浪するハンセン病患者の存在が欧米人の目に触れることを国の恥と考え、その一掃を図ったものでした。この法律は1931年に「癩予防法」と名前を変え、当時の国家主義思想に基づいて改正されました。この法律に前後して行われた「無らい県運動」とともに、「民族浄化」「無癩日本」を旗印に、

全ての患者を根こそぎ強制収容・隔離して、新たな患者発生を絶滅しようとする政策が推進されました。

戦後、プロミンというアメリカの特効薬が日本に入って、ハンセン病が完治する病気となり、日本国憲法により基本的人権が認められた後にも、国は1953年に「らい予防法」を改正したものの、強制隔離政策を継続しました。国際的には「ローマ宣言」により、ハンセン病患者の差別待遇的諸立法の撤廃、在宅治療の推進、社会復帰の援助などが決議されたのちに、多くの患者は人権侵害にさらされ続けました。

この「らい予防法」は、1996年になってようやく廃止され、当時の厚生大臣は、廃止の遅れについての謝罪はしましたが、90年におよぶ強制隔離政策という国の人権侵害行為についての謝罪はありませんでした。このような中、1998年7月に熊本地方裁判所で被害者たちによる国家賠償請求訴訟が提起され、2001年熊本地裁は原告（患者・元患者）の訴えを認め、国に被害を受けた人々に対する損害賠償を命じました。国は控訴を断念し、判決が確定することになります。その後、首相や衆議院・参議院による謝罪も行われました。これで法的な問題は一応の解決を見ましたが、差別がなくなったわけではありません。

日本各地にあったハンセン病施設に入るときには、「園名」という別の名前を与えられたそうです。故郷の家族などに迷惑をかけないためでした。一度施設に入るともう出られない覚悟をしなければなりませんでした。もちろん、戦後には、完治した元患者の一部は施設の外に出ることも

できましたが、故郷に戻ると家族に迷惑をかけはしないかと考えて、実家には帰れなかった人がほとんどだそうです。

結婚するにしても、断種手術・不妊手術を受けることが条件になっていました。ハンセン病は遺伝病ではないにもかかわらずです。そして、「母体保護法」の前身である「優生保護法」によってそれは正当化されました。「優生保護法」が廃止され、「母体保護法」となったのは「らい予防法」が廃止されたのと同じ年の1996年でした。ハンセン病は完治する病気であり、遺伝性ではないという科学的・医療的見地は顧みられなかったのです。

ハンセン病差別には「ケガレ意識」が強く結びついています。そして現在の私たちは、新型コロナウイルスが流行しだしたときの新たな「ケガレ意識」を鮮明に覚えているのではないのでしょうか。当時は、コロナに罹患することが犯罪でもあるかのように言われました。そのようなケガレ意識と闘っていくには、正確な知識と確かな判断力が求められます。

イエス・キリストは、聖書の別の箇所（マタイによる福音書15章16―20節）「口から出て来るものが人を汚すのである」と仰いました。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などが人を汚すのです。差別はその最たるものだと思います。そして、人種差別、部落差別、職業差別など多くの差別の源には「ケガレ意識」があります。

私たちは危機に陥るとお互いに疑心暗鬼となり、疑いと怖れは差別を生みます。差別を生むのは感染症だけではありません。社会的・経済的・政治的危機が続くと人々はスケープゴート（犠牲

のヤギ)を見つけて、責任を転嫁しようとしています。物事を極度に単純化し、自ら考えることを放棄して、白黒・善悪をはっきりさせようとしています。このような時に犠牲となるのは、決まって立場の弱い人々です。最近では、日本在住の外国の人たちがスケープゴートにされています。

私たちは、付和雷同して、そのような犠牲者を生んではいけません。「最も弱い立場にいる人々」を自分のこととして慮つかねばならないのです。それが「For Others」ではないでしょうか。

ケガレ意識に呑まれないためには、他者の状況を冷静に把握する知性と他者の心を慮る豊かな感性・想像力、また、自分とは異なるものを受け入れる柔軟性と広い視野、なすべきことをなしていく決断力・実行力が不可欠です。そして何よりも、ダメなものはダメと言える倫理観と勇気が必要です。これらが本物の教養であると私は信じています。この教養なくして、私たちの内なる差別の壁を打ち壊すことはできません。

病氣から回復するだけでは本当の癒しにはならないのです。その人が社会に再び受け入れられることで本当の癒しが完成します。リハビリテーションには、身体機能の回復のみならず、名誉回復という意味があります。名誉と尊厳が与えられて、はじめて真の癒しとなるのです。

イエス・キリストは、数々の癒しの奇跡を行いました。そのほとんどが社会的な疎外をもたらす病の癒しであったことが大きな特徴です。身体や精神に障がいがある人々をイエス・キリストは癒されましたが、そのような人々は、単に病氣や障がいがあるだけでなく、それにより社会からはじき出されてしまうことにより、苦しんだのではないのでしょうか。イエス・キリストは、規

定の病の患者に手を差し伸べ、触れて、癒しました。イエス・キリストの癒しは、病気の治療のみならず、あなたは神様に愛されている神の子である、安心しなさい、という宣言でもあったのです。これからも様々な差別は存在し続けるし、新に生まれるかもしれない。しかし、皆さんはどうかケガレ意識に吞まれずに、人間と人間の壁を打ち破る人生を送って欲しいと心から願っています。

祈り…天におられる主なる神様、私たちはどうしてもケガレを恐れ、差別をしてしまう存在です。しかし、どうかイエス・キリストに倣い、私たちや人々の間に存在する心の壁を打ち破ることができるよう、知恵と力をお与え下さい。この祈りを私たちの主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン

(二〇二五年七月二五日 緑園)

信仰義認を映像で表現する

『アララトの聖母』

(アトム・エゴヤン監督、2003年)

ローマの信徒への手紙 八章五〜六節

藤 卷 光 浩

(グローバル教養学部文化表現学科教授)

私はいつも、キリスト教信仰に関係する映画作品を紹介しています。今回は、アトム・エゴヤン監督による『アララトの聖母』です。エゴヤン監督は両親がアルメニア人で、自身の民族的出自にも関心を持ち、それを作品に盛り込むことが多いです。

まずアルメニアという国ですが、キリスト教を世界で一番最初に国教に定めたことで知られています(紀元301年)。映画のタイトルにもある「アララト (Ararat)」というのは、ノアの箱舟がたどり着いた山で、キリスト教と非常に深い関係があります。

この作品は、1915年に起きたオスマントルコによるアルメニア人の虐殺事件をモチーフにし

ており、現在わたしたちが、この事件を実際に起こったこととして信じることを、または否定して信じないことが、人間のあり方とどのように関係しているのかを見せつけてきます。

そして、このことは信仰とも深い関係を持ってきます。この作品においては、「信じること」が、主イエスの復活を「信じること」と隠喩的に関わってくるのです。具体的には、この作品は『ローマ人への手紙』の現代バージョンであると思うのです。人間が過去に起こったことを「信じること」と、そしてその情熱によって、人間が絶対者に招き入れられる信仰義認を問おうとしているのです。しかし、それを得るためには、私たちが人間である限り大きなハードルを越えなくてはなりません。

過去に何が起こったのかを現在において信じることを、または信じないことは、つまるところ過去を記憶するという人間の行為と関わっています。これはなかなか難しいものです。主イエスが復活したことを、アルメニア人虐殺が起こったこと——これらを思い出す行為には、どうしても人間が介入することになってしまいました。これが記憶継承の難しさです。

エゴヤン監督は、過去を信じることの帰結や、その行為を通しての人間存在のあり方を問うために、作品の舞台として映画製作の現場を選びます。キャストたちがみな映画製作に関わり、記憶形成に関わる場面をつくり出し、そこでの問題点を見せているのです。この設定の中で、キャストたちが、虐殺という過去を、それぞれのように信じて演じるのか、または信じないで演じるのか——「信じる」ことの意味を問おうとするのです。

例えば、トルコ人総督を演じるトルコ系カナダ人俳優ができてきますが、この人は、撮影現場の外でも虐殺を否定するセリフを吐きます。過去に何があったのか信じない人ですね。一方、過去を信じる人の代表として、作品を制作する監督も登場します。が、この人は少し事実をゆがめて作品を作り上げていきます。虐殺の舞台となった土地からは、アララト山は見えないのですが、アルメニア人の精神性を表現するということで、山がみえる舞台を作り上げるわけです。

人間が過去を思い出す行為に介入することは不可避なのですが、それぞれの登場人物の（現在の）関心事が、過去をどのように信じるのか、または信じないのかという記憶形成のプロセスを、作品は表現しているのです。

これらのシークエンスが、パウロによる本日のみことばと深く関わっています。

肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。（『ローマ人への手紙』第8章、

5節-6節）

パウロがエスパニアへの伝道の旅の途中で、したためた書簡の中の一節です。信仰義認が説かれていることで知られる箇所です。一言で言えば、過去を信じること、つまり主イエスのよみがえりを信じることによつて、神との関係が義とされる、つまり、いかなる罪人であっても、正しいものとされる、という意味です。一方、死すべき肉体を持つ人間は、それぞれの関心事や欲望によつて、過去を曲解してしまい、過去を信じるのができないのです。そのため、正しい者とされること

もないし、絶対者を喜ばせることができないわけです。

『アララトの聖母』はこの信仰義認を、映像で表現するのです。自分の私的利益の実現のために、虐殺事件を否定したり、脚色して描こうとする者たちを登場させます。死すべき肉体を持つ人間は、自身の固有のフィルターによって、過去をそのまま思い出すことができないのです。ですから、パウロは、他の箇所でも「もし肉にしたがって生きるのなら、あなたがたは死ぬことになりました」とも言っております。

話を作品の方に戻します。主人公のアリという青年がいるのですが、彼はカナダの空港で捕まっております。現地で取材をした彼のフィルムリールの中に麻薬が入っていることを疑われたのです。確認するために開けてしまうとフィルムがダメになってしまったため、検査官はあけることができません。アリは、このリールが虐殺事件を立証するためにいかに重要なのかを熱弁します。しかし、アリの知らないところでアリの彼女の知り合いが仕組んだ麻薬がどうやら入っているようなのです。ですが、アリは、これが本当のフィルムであることを強く信じています。

そのため、彼の虐殺の話は、迫真のものになってゆきます。検査官は、実は自身が麻薬であることを知つていながら、強く信じて疑わない彼を、試すような質問をいくつもします。この作品の後半は、この二人の緊張感あるやり取りが中心となって進行してゆきます。

詳細な結末は、みなさんに確認していただきたいのですが、「信じる」ことによって、絶対者は人間との関係を義とする——そんな結末を、この作品は用意しています。人間は自分だけの関心

や欲望によって過去を信じたり、または否定することは避けることはできないのだけど、そこから一步踏み出すための手段、それが「強く信じる」ことにあるという話なんです。この作品は、アルメニア人虐殺の記憶をモチーフとして使用し、現代的な意味での信仰義認を表現しています。

パウロは言いました。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(創世記15:6)。
私はアリのように生きたいし、主イエスの復活を強く信じているのです。

(二〇二五年九月二九日 緑園)

ぶどう園のたとえが私たちに語りかけること

マタイによる福音書 二〇章一〜一六節

新 倉 久 乃

(本学非常勤講師)

今日は「ぶどう園を所有する家の主人とそこで働く人」についてお話しようと思います。マタイによる福音書20章にある有名なたとえ話です。わたしは、これまで、日本に住む外国籍の人の生活福祉相談のソーシャルケースワーカーをしてきました。今回は、相談で出会う人びとのことを思いながらお話ししたいと思います。

今日のお話のキーワードは、3つで「たとえ話」、「家の主人」、「1デナリオン」です。

たとえ話というのは、聖書の中でイエス・キリストが、民衆の生活を思いながら、わかりやすく「神様とはどんな方か」を話す場面によくみられます。ここで、家の主人というのは神様を意味します。そして、「1デナリオン」というお金の単位ですが、イエス様がおられた当時、労働者の1日分の給料、つまり衣食住のためのお金であったそうです。

さて、家の主人つまり神様は早朝、昼、午後と広場に労働者を集めに行きました。私はここで、

夕方5時に出て行き、広場ににいる人に声をかけた、というところに心ひかれました。まず、そんな時間から人を雇おうとは思わないし、そんな時間にぶらぶらしてるのは怠け者だ、と多くの人はそう思うでしょう。でも、家の主人は、ぶどう園で働くようにと言って、一日の給料はその一番遅く来た人から支払っています。そして、全員同じ給料でした。聖書の中でも、早朝から働いた人が不公平だと文句を言いました。たしかに、そうだなとも思います。

私は、このたとえ話から二つのことを考えました。ひとつは神様の問いかけ、二つ目は生きる時に必要なものです。

一つ目は、神様の問いかけです。もう働くには遅すぎる時間に、神様はわざわざ広場に行つてそこにいる人に声をかけました。先入観を持たずに「なぜ、何もしないで一日中広場に立っているのか」と。そして、広場にただ立っていた人は「誰も雇つてくれないのです」と答えています。考えてみれば、家の主人が尋ねてくれなければ、この人たちの声は聞けなかつたものです。神様が問いかけて下さらなければ、彼らは黙つたまま、食事もできず、空腹のまま路上に眠り、物乞いをしたかもしれません。女性なら騙されて身を売らされたかもしれません。この人たちは、家の主人つまり神様の問いかけがあつて、「初めて声を上げられた」のです。ここで私は、この人たちの「雇ってもらえなかつた」理由に思いをはせました。障がいや病氣、要領が悪くて機会がない、言葉が不自由な外国人、女性だから、LGBTQだったなど、色々な事情があつたかもしれません。神様は「怠け者だ」などという先入観なく質問し、ぶどう園にいらつしゃいといってくださいました。

さて、私は、外国籍の人たちの生活や福祉相談を受ける仕事をしていた、厳しい状況にある外国籍の人に会い、そこから抜け出す方法をいっしょに考えてきました。私が出会った人は、工場や工事現場で怪我をした、日本人夫の暴力を受け、やっとの思いで子どもと家を出て行くところがない、母国のブローカーや親に物のように売られ日本にやってきた人身売買の女性被害者でした。彼・彼女らの境遇は、私の人生にはまったくありえないことでした。そんなことが彼・彼女らに降りかかっていたのです。ケースワーカーの仕事として、まず「どのようにして、ここにたどり着いたのか」と尋ねます。そして、尋ねなければ、私には全く知ることのなかった人生でした。しかし、話を聞いていると時々、「それは自分が悪いんじゃないのか、なぜ経験から学ばないのか」という批判めいた思いが沸き上がります。先入観なく尋ねる神様の問いかけは、「愛」に基づくものだと思います。批判や先入観はなかったでしょう。何よりも「問いかけ」をしなければ、葬り去られた声であり、それがきつかけで、色々な事情を理解する入り口となっていたと思います。

二つ目は、神様は必要なものを知っておられるということです。夕方5時に広場に立っている人にも、ぶどう園に行きなさいと言っています。そこには色々な仕事があったのです。ぶどうを収穫する、そのぶどうをかごにいれる、重いかごを運ぶ、収穫をする人の食事を用意したり、後片付けや掃除をする、それぞれの場で働いたことでしょう。

そして、だれにでも1デナリオンを支払っています。これは神様がどのような仕事も大切なもので、働いて得る1デナリオンというお金は、誰でも生きるために必要なものであると知っておら

れたのだと思います。神様は、誰にでも必要なものを与えてくださるということなのです。

今、世界中で、能力主義、自己責任、そして経済力の格差、宗教の名によって分断が広がっています。それが紛争、戦争へと進んでいる様子を見聞きするたびに、心を痛める日々です。もし、このたとえ話のように、まず「あなたはなぜそこにいるのですか」と批判や先人観を持たず、問いかけてみたらどうなのでしょう。それぞれの事情を理解する糸口が見えるはずです。

また、私たちは人生において順風満帆なことばかりではないこともあります。たとえ話のように、夕方5時になっても広場に立ち尽くすこともあるかもしれません。一人でいろいろなものを抱え込んで動けない、誰からも振り向かれない孤独に苛まれるという時、「あなたはなぜそこにいるのですか」と先人観なく、愛を持って問いかけ、必要なものを与えてくださる神様がいらっしゃることを忘れずにいたいと思います。

お祈りをいたします。

全能の父なる神様、今日、私たちがここに集められ、あなたのみ言葉を聞くことができますことを感謝します。ぶどう園の労働者のお話から、自分と異なるものを理解することを教えていただきました。どうぞ、私たちの人生の節目、節目に、神様からの励ましや慰めが与えられますように。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。

アーメン

(二〇二五年一〇月二日 緑園)

いちばん偉い人

ルカによる福音書 二二章二四〜二七節

川口 葉子

(本学非常勤講師)

あるときイエスの弟子たちが、自分たちのなかでいちばん偉いのは誰かを決めようとして言い争いでいたといいます。まるで子どものケンカです。年がいちばん上だとか、能力がある、お金をもっている、伝道で実績を上げた、そういうことで自分がいちばん偉いと主張していたのかと想像します。詳しくはわかりませんが、お互いに人の上に立とうとしての言い争いです。なんとも不毛で、バカバカしい、と思います。

偉いとか偉くないという少し大袈裟ですが、こうやって人の上に立とうとすることは、私たちに理解できるのではないのでしょうか。私たちは意識するにせよ無意識にせよ、いつも人を評価しています。あの人は頭がいい、才能がある、センスがある、おもしろい、かわいい、かっこいい。うらやましい。ああなりたい。そう思う時もある、あの人は大したことがない、つまらない。付き合う価値がない。あんなじゃなくてよかった。あれよりはマシ。そうやって人を軽んじるこ

ともあります。何かができる、何かをもっている、そういうことが私たちにとって価値があることで、それで、人よりも上だと思えれば安心し、下に感じれば劣等感になる。私たちはそういう世界に生きています。

誰が偉いかと争う弟子たちにイエスは言います。この世界では、王たち、権力者たちが上に立って力をふるっている。しかし、「あなたがたはそれではいけない」。「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」

驚くようなことばです。この世の秩序がまったく逆転するようなことばです。いちばん偉い人、いちばん上にいる人こそ、いちばん下になりなさいというのです。弟子たちに向けて語られていることを考えると、いちばん偉くなりたくない人こそ下に立つ者となりなさい、と捉えてもいいでしょう。いちばん若い者は、周りの年長者に敬意をもつて接します。仕える者は、自分をいちばん下に置いて、人のために働きます。偉い人、偉くなりたくない人ほど、そのようになりなさいと、イエスは言われるのです。

会社でいうと、社長に対して新入社員のようになりなさい、というような感じでしょうか。

教会というのは、この世とは価値が異なるところです。それは、イエスが言うように、偉い人、社会的な立場がある人も同じように仕える者となり、反対に、この世では軽んじられる人も同じように尊ばれる。社会的地位が高いとか、いい大学にいつているとか、大手企業に勤めているとか、

そういうことはなんの意味も持たない。私たちの目から見てすごいと思う人も関係ない。教会と
いうのは、神のもとにある集まりというのは、誰もが価値のある存在として大切にされるとこ
ろであり、誰もが自分を低くして仕え合うところです。

何かができるからといって人の上に立つことにはならないし、反対に、できないからといって、
劣っていることにはならない。むしろ、何もできないという人がそのままそこにいるということ、
それこそ、その人自身が大切にされていること、その存在が価値のあるものとされていることの現
れです。教会として話しましたが、このチャペルもそうですし、キリスト教主義であるこの大学も、
この精神を大切にしています。

イエスは続けて言われました。「食事の席に着く人と仕える者とは、どちらが偉いか。食卓に着
く人ではないか。しかし、私はあなた方のなかで、仕える者の方になつていく。」

イエス・キリストは神ご自身ですし、弟子たちにとっては師、先生でもあります。完全にいち
ばん偉い人のはずのイエスが、弟子たちに仕えたというのです。

神のもとにある集まりが、この世と価値が異なるのは、このようにイエスがまず仕える者となつ
てくださったからです。そのイエスの姿勢が教会にあるからこそ、誰がすごいとか偉いとか、社会
的な評価や地位には関係なく、誰もがお互いに仕える者なのです。

イエスは、わたしのように仕える者となりなさい、と言われました。イエスが弟子たちに仕え

たということ、イエスが弟子たちを愛されたということ、相手がイエスにとって大切な存在であった、だからこそいちはん偉いはずのイエスが、へりくだって、相手のために働いたのです。

私たちも、相手を本当に大切に思うからこそ、相手のために仕えることができるのだと思います。相手を愛するがゆえに、相手の必要のために自分の労力も時間も使っていく。

しかし、やはり覚えたいのは、私たちはまず、イエスによって愛され、仕えられたのだということです。はかりしれない多くの犠牲を私のために払ってくださった。その愛によってこそ、人に仕えることができるのだと思います。

フェリス女学院の For Others。人に仕えることを大切にしています。大学生は忙しいし、自分のことに精一杯で人のために使う時間も労力もないかもしれません。でも、ぜひこの大切な大学生という期間に、人のために、ということを意識して、そしてぜひ実践してみたいと思います。人のために自分を差し出していく、それは、相手を大切に思うからこそできることです。そして、ぜひ覚えていただきたいのは、そのようなあなた自身がすでに神様にとって大切なものであるということです。愛されているからこそ愛していく、キリスト教が大切にしているこのことも、ぜひこの大学で味わっていただきたいと願っています。

(二〇二五年一月一日 緑園)

「見えないものに目を注ぐ」

コリントの信徒への手紙Ⅱ 四章一八節

饒平名 尚子

(グローバル教養学部心理コミュニケーション学科教授)

私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。(聖書 聖書協会共同訳)

本日の聖書箇所では見えるものと見えないものが比較されています。見えるものは、わかりやすいのですが、それは一時的であり、むしろ見えないものにこそ目を注ぐ大切さが語られています。私たちは目に見えるものに心を奪われ、振り回されることが多い毎日です。多くの人がSNS上の「いいね」やフォロワー数の増加、さらに外見の美しさ、お金等を求めています。そして、何が真実で何がうそなのかも見分けることが難しい現代社会です。見えるものの方が確実に真実かといえ、決してそうとは言えない現実に直面しています。そんな社会に翻弄され、疲れを感じる人も大勢います。

さて、11月11日は日本ではポッキーの日だそうです。中国では独身の日として大きなイベントが開催され、人々は買い物に奔走すると聞きました。数年前の独身の日に、中国の大手の通販サイトで24金でできた美顔器が売り出されました。値段はなんと40万円。日本の企業が作った製品でしたが、皆さんだったら、買いますか？24金の滑らかな使い心地、使っても使ってもメッキががれるようなことはありません。「顔の美しさを願う心に値段はありません」というキャッチフレーズで、人気のプロガーが宣伝したそうです。肉体はいつかは自然に衰えていくものであり、目に見えるものは一時的である。しかし、それでも人の心は目に見えるものにする事で何かの安心を得ようとするのでしょうか。

先日、「神が与えるGood things, good giftとは何か」ということについて、マタイによる福音書の7章8節から11節を読んで、キリスト教学の学生さんたちと一緒に考えました。特に11節には、あなた方は悪い者（つまり不完全な親）でありながらも、「自分の子どもには良い物を与えることを知っている。まして、天におられるあなたがたの父は、求める者に良い物をくださる。」と書かれています。さて、神様が与えて下さる良い物とは何だろうか。とても難しい問いでした。が、出てきた意見を紹介すると、「平和」、「命」、「出会い」、「感謝する心」、「試練」、「物質的なもの」ではなくて目に見えないもの、「ことば」等がありました。

このうち、「命」は、当初、「お母さんが自分を生んで命をくれたのだから、神様が与えるものとは違うかもしれない」という意見もありました。しかし、母親に命を与えた方がおられます。私た

ちが無事生まれてこられたことは奇跡であり、母親が「無事に生みます」と自分で決心すれば、その通りに生まれるわけでもありません。そうすると、「命」もまた神様からの贈り物ではないかと考えられました。

印象に残ったのは、「試練」でした。「試練を通して成長できることがあり、試練もまた神様からのよい贈り物ではないか」とある学生さんが言いました。この意見には、クラスの皆がシーンとなり、感じ入ったのでした。試練は嫌ですし、避けたいものですが、しかし、試練を通して同じ苦しみを通っている人の気持ちが良いわかるようになったり、精神的に強くなれたり、成長する機会となるならば、それもまた大切な贈り物ととらえることができるのですね。

「感謝する心」についても、すごい答えだと思いました。聖書に「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(テサロニケの信徒への手紙 1 5章16〜18節)と書いてあり、これはキリスト・イエスにおいて神があなたがたに望んでいることだと記されています。どんな状況にあっても、自分が一人で生きているのではなく、多くの助けがあり、天地を創造された方がおられ、私たちの生活を支えてくださっている。その視点をもって、感謝をしなが人生を生きていくことは、本当に大切なことだと思われました。

「ことば」については、「目に見える物質的なもの」ではなくて、「目には見えない部分が大事であり、私たちが神様のことを知ることができるようになるために必要なことば」という意味で、ある学生さんが挙げてくださいました。これを聞いて思い出したのが、「初めに言ことばがあった。」(ヨハ

ネによる福音書1章1節)です。この「言ことばは神と共にあった。言ことばは神であった」と書かれているのですが、さらに聖書を読み進めていくと、1章14節、「言ことばは肉となって、私たちの間に宿った」とあります。目に見えないはずの言ことばが、肉体をもつて私たちの間に住んだのだ、と。なんと不思議な、ありえないようなことでしょう。でもそれが実現したのだ、と聖書は語ります。

まもなく12月。クリスマスが近づいてきましたが、目に見えない、人間の想像や理解をはるかに超えた存在である神が、私たちにわかるように、人としての姿をまとつて私たちの間に宿った、この世界に来てくださったことを感謝し記念するのがクリスマスです。神のことばとして現れたのは、イエス・キリストです。この方こそが、神様の与えて下さる良いもの、良い贈り物、そのものだと感じられます。神を表すために、神のことばがわたしたちに与えられました。この良い贈り物は私たちすべての人に与えられています。この大学で、皆さんとともにこの贈り物を受け取り、クリスマスを祝う不思議さに感謝したいと思います。

(聖書箇所は全て『聖書 聖書協会共同訳』からの引用による)

(二〇二五年一月二日 緑園)

神のなされることは皆その時になつて美しい

コヘレトの言葉 三章一〜八節

秋 岡

(学院長)

今日のチャペルサービスには、保証人の方にもご参加いただいています。大学では、このようなチャペルサービスを、授業のある日は毎日、行ってきました。ここでは聖書が読まれ、そのメッセージについての話がなされますが、お話を担当するのはキリスト教の専門の先生だけではありません。他の専門の教員や、職員、そして学生も、それぞれの問題意識から聖書を読み、自分なりに考えてきたことを語ります。大学の構成員一人ひとりが聖書の言葉に向き合い、そのメッセージを分かち合う。そして互いに「教え合い」「論し合う」。フェリス女学院では、創立以来一五五年にわたり、そのような姿勢が大切にされてきました。

学内礼拝は、特定の宗教への勧誘のために行われているわけではありません。聖書という世界の古典を新しく読み直し、現代に生きる私たちがそこから何を学べるかを共に考える場です。時には、学生たちから見れば人生の先輩にあたる教職員が、自身の経験を振り返って語ることもあ

ります。そうした言葉に、若い学生の皆さんが耳を傾けてくれることも期待しています。私自身も学生の頃、先生や先輩が聖書を読みながら真摯に生きることの意味を問う姿に接し、多くのことを学びました。学食での食事による栄養補給も大事ですが、学内礼拝での心を養う食事もまた、学生生活において大切なものだと実感しています。

私が若い頃、恩師から教えられ、心に深く刻まれた聖書の言葉があります。「神のなされることは皆その時になつて美しい」という言葉です。これは、今日お読みした聖書箇所のお話に出てくる言葉です（現在緑園チャペルで使われている『聖書協会共同訳』では「神はすべてを時に適つて麗しく造る」と訳されています）。

その恩師は、私の人生の節々で相談に乗ってくださいくださった方で、昨年九十歳になられました。あの時、その先生が私にこう話されたことがありました。「秋岡君、人生には行き詰まる時が必ずある。けれど後になつて思うと、それにも実は意味があつて、人生に無駄なことは何ひとつないんだよ」と。それを聞いた当時の私は若く、正直なところ「ホントかよ」と思いました（先生ごめんなさい）。しかし先生は、「神のなされることは皆その時になつて美しい」とおっしゃるのです。半信半疑でしたが、この不思議な言葉がかえつて心に残りました。そして、自分の目から見て理不尽と思える出来事が起こった時に、「神様、これはあなたのどんなご計画なのですか」と問う視点を与えてくれました。ただ、この「人生に無駄なことはない」という言葉も、年齢を重ねるにつれ、「もしかしたら本当にそうかもしれない」「いや、そう信じたい」と、心から思えるようになってき

たから不思議です。

今日読んだ『コヘレトの言葉』の箇所は、「天の下では、すべてに時機があり／すべての出来事に時がある」と始まります。すべての事柄には時があり、それがいつなのかは神様によって定められているというのです。では、神様はどんな「時」を定められるのでしょうか。第二節以下には、「生まれる時と死ぬ時」「植える時と抜く時」をはじめ、「泣く時と笑う時」「愛する時と憎む時」「戦いの時と平和の時」など、全部で十四組の対比が挙げられています。これらは、嬉しいことと悲しいことのペアでもあります。私たちの人生は、このような対極の間で「もみくちゃ」にされる人生です。良いことばかりなら嬉しいのですが、悪いこともセットになっている。誰の人生にも、その両方が起こります。しかし聖書は、そうしたすべてを神様が私たちのために用意され、「すべてを時に適って麗しく造る」と言うのです。

私もすでに高齢になりましたが、いまだにこの言葉を確信を持って言い切れるか、自信が持てない時もあります。ただ、小さな人間の頭と心では計り知れない、大きな神様のご計画の中で、きつと美しいことが行われているに違いないと信じることは、大きな慰めでもあります。

今日の礼拝で歌った賛美歌《球根の中には》（『讚美歌21』五七五）も、そうした思いを歌っています。作詞作曲はナタリー・スリースという女性で、フェリスの卒業式でもよく歌われてきた曲です。歌詞はこう始まります。「球根の中には花が秘められ、さなぎの中からのちはばたく。寒い冬の中、春はめざめる……」。枯れたかと思った球根から花が咲き、死んだように見えるさなぎ

から蝶が羽ばたく。それは人間の理解を超えた「神様の力のわざ」によるものだと言います。卒業式でこの歌を歌う時、「私はまだ球根のままだ」「いつ花開くのだろう」と不安に思う人もいるかも知れません。けれどこの賛美歌は語りかけます。「夜の後には、来るなど言っても必ず朝が来る。どんなに厳しい冬でも、その後には必ず春が備えられている」と。第三節にある「いのちの終わり」は、「いのちの始め」という言葉は、もとの英語の歌詞では「In our end is our beginning」と表現されます。終わりにこそ、新しい始まりがあるのです。私たちは時に「もうだめだ」と思うこともありますが、神様の目から見れば、そこにも新しい出発が備えられています。朝が来ない夜はなく、春が来ない冬はありません。その用意をしてくださっている神様のご計画を信じ、身を委ねて歩んでみたいと思います。

聖書は私たちに、自分の小さな殻から出て、神様の大きな視点で世界を見つめて生きるよう促しています。「なぜ生かされ、何をなすべきか」という変わらぬ人間の本質を問い続けること。その視点を、これからも大切にしていきたいと思います。

祈りましょう。神様、今日も聖書の言葉に耳を傾ける時を与えてくださり感謝します。私たちは、自分の力だけで生きようとして悩み、絶望し、「もうだめだ」と思ってしまうことがあります。しかし聖書は、神様の大きな目とご計画の中で物事を見るようにと教えてくれます。人の力は小さくても、神様の力は大きい。どうか、あなたの力とご計画を信じて歩む私たちとしてください。

(二〇二五年一月二四日 緑園)

クリスマス——キリストの二つの名前

マタイによる福音書 一章一八―二五節

相澤 一

(宗教主事・グローバル教養学部心理コミュニケーション学科教授)

「クリスマスはイエス・キリストの誕生日ではなく、誕生を記念する日である」ということは、クイズ番組などでも取り上げられることがありますから、ご存じの方も多くなってきたようです。しかし、では、「なぜクリスマスを記念して祝う必要があるのか?」「クリスマスにどんな意味があるのか?」と改めて聞かれますと、多くの人が理解しているとは言えないでしょう。

クリスマスの意味は何か? それは、イエス・キリストはなぜ、何のために、何をするために生まれてきたのか? ということになります。私たちがクリスマスを本当にお祝いするためには、イエス・キリストがお生まれになった目的を知り、しかもそれが現代の私たちにどういう関係があるのかを知る必要があるのです。

マタイによる福音書は、イエス・キリストが生まれてきた目的を、名前を手がかりにして、私

たちに示しています。

一つは、ヨセフの夢に現れた天使が告げた名前です。「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

もう一つは、預言者によって預言された名前です。マタイは、旧約聖書のイザヤ書七章一四節を引用して、こう語ります、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この二つの名前は、クリスマススの目的を、違った角度から言いあらわしていると理解することができます。イエスという名前は天使から、インマヌエルという名前は預言者から告げられた名前ですが、どちらも、クリスマススの出来事の背後にある神様の御心、神様のご計画をあらわしているのです。

「その子をイエスと名付けなさい」という天使の命令には、「この子は自分の民を罪から救うからである」という、理由を説明する言葉が続きます。イエスとは、ヘブライ語でヨシユア（旧約聖書に出てくるヨシユアと同じ名前です）で、新約聖書の時代にはイエーシユと発音されていました。これは、「救い」という意味の言葉です。ですから、この名前は、イエス・キリストが生まれてきたのは、「救う」ためであった、ということをあらわしています。

一口に「救う」と言いますが、いろいろな救いがあります。社会福祉も社会的・経済的な救い

ですし、病気を治すことも肉体的な救いです。しかし天使が語ったのは、そういった救いではなく、罪からの救いでした。

社会的・経済的な救いや、病気からの救いも、もちろん必要ですし、重要です。しかし罪から救われなければ、根本的な救いにはなりません。そしてそれが、天使が告げた救いです。罪は人間を神から引き離し、人間を神ならざるものの奴隷とします。その結果、人間は自由を失い、生きる意味や力を失います。罪からの救いがあつて初めて、社会的・経済的な救いも病気からの救いも本当に意味を持ち得ます。

イエスすなわち救いという名は、イエス・キリストは私たちを罪から救うために生まれてきたということであらわしている——それが天使が告げたことであり、マタイもそう理解したのです。

もう一つの名前は、インマヌエルです。「これは、『神は私たちと共におられる』という意味である。」ウルリヒ・ルツという新約聖書学者が、四巻本の大部のマタイによる福音書の注解書を書いています。彼によると、一章二三節の「インマヌエル¹¹神は私たちと共におられる」は、マタイによる福音書の最後の、締め括りの言葉である二八章二〇節の「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と対になって、括弧のように、マタイによる福音書全体を囲っていて、マタイによる福音書全体がその中に入れられ、内容全体がそれによって規定されているといえます。

二八章二〇節の「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」は、十字架に架けられて

殺され、三日目に復活して弟子たちの前にあらわれ、天に昇られた、いわゆる高挙のイエスの言葉です。それと、一章二三節「インマヌエル」神が私たちと共におられる」が対になっているということは、インマヌエル「神が私たちと共におられるとは、十字架に架けられ殺され復活したイエス・キリストが共におられる」という意味である、ということであらわしています。

そして、それがイエス・キリストのもう一つの名前であるということは、主イエスがお生まれになった目的は、十字架に架けられて殺されること、そして復活し、いつも私たちと共にいるようになることであつた、ということを意味しています。ですから、今日ここにいる私たちもまた、インマヌエル「神が私たちと共におられる」と言うことができるのです。

このように見てくると、イエス・キリストの二つの名前によって、今から二〇二五年前にイエス・キリストがお生まれになった目的は、十字架にかかるためであつたということが見えてまいります。それは、なんともつたいない、ありがたいことではないでしょうか。

イエス「救いという名前は、イエス・キリストは私たちを罪から救うために生まれてきたということであらわしています。それは、十字架に架けられ、私たちの罪が赦されることで成就しました。インマヌエル「神が私たちと共におられる」という名前は、イエス・キリストが十字架に架けられ殺され、復活し、世の終わりまでいつも私たちと共にいてくださることで成就しました。

これが、現代の私たちにとってのクリスマスの意味です。「神も仏もない」とか「神は死んだ」と

か、いろいろな人がいろいろなことを言います。しかし、そういう人たちが何を言おうが、私たちは、イエス・キリストの十字架によって罪赦され、インマヌエル、神が共にいてくださる、復活のイエス・キリストが共にいてくださる人生を生きたことが出来るのです。そのことに感謝し、クリスマス喜び祝いましょう。I wish you a merry Christmas. よいクリスマスをお過ごしください。

(二〇二五年十二月一日 学院教職員クリスマス礼拝)

闇から光が

ルカによる福音書 二章八―一六節

谷 口 昭 弘

(グローバル教養学部心理コミュニケーション学科教授)

先週・今週のチャペル・サービスは、アドベントとクリスマスをテーマとしたメッセージをお届けしています。このうちアドベントというのは、「到来」という意味の言葉です。主イエス・キリストの到来を覚え、それに備える時ということでしょうか。このアドベント、日本語では待降節たいてうとなっております。つまり何か特定の一日というよりは一定の期間というニュアンスがあります。そしてキリストが「降誕」、すなわち神の子イエスさまが天から降りてこられ、人間の子として誕生なさったことに対して心を備える、あるいはよりクリスチャン的に言うと、信仰をもって備えるというシーズン、ということになるのだと思います。

アドベントとクリスマスのうち、クリスマスの日については、ほとんどの方がご存知かと思います。教会的には、もちろんイエス・キリストの生誕を祝う祝日です。日本では不思議とクリスマス・イヴの方が賑やかで、何でも恋人とロマンチックな夜を過ごす日になっているのだそうです。これ

はもちろんキリスト教とは関係がなく、クリスマス・イヴに遠方からボーイフレンドが新幹線に乗って帰ってくるというJR東海によるテレビ・コマーシャルから始まったものでした。

ところで12月25日はキリストの誕生日かどうか、というところ、これはこれで、定かではありません。というのも、キリストの誕生日は聖書のどこにも書かれていないからです。一節によると、12月25日をキリストの誕生日とする最古の記録は4世紀のローマにあるそうです。ローマ帝国では、太陽崇拜が広く行われていました。ローマ暦では12月25日が冬至で、この日を太陽誕生の祝日として祝っていたそうです。おひさまの照る時間が冬至以降、どんどんと長くなるからでしょう。教会はこの祭日を取り入れ、「正義の輝く太陽」であるキリストの誕生の日として祝うようになったそうです。ですので、クリスマスはイエス・キリストの誕生日、というよりは、イエス・キリストの誕生を祝う日、といった方が正確かもしれません。

ところで先週・今週とアドベントとクリスマスが一つの枠になっているのには理由があります。実はクリスマスは確かに12月25日なのですが、その前後を「クリスマス・シーズン」とキリスト教では捉えているからです。そのシーズンが「アドベント」の期間から始まるのです。これはクリスマス・イヴから4つの主日、4つの日曜日をクリスマス・イヴから数えるものです。今年は11月30日、12月7日、12月14日、12月21日、そしてイヴの12月24日です。ですので、今年は11月30日の日曜日から、アドベントが始まっています。クリスマスチャンの家では、この11月30日からクリスマス・リースを玄関に飾り始めます。そして、来年の1月6日、この日はエピファニーというまた別の意味を

持つ日なのですが、この1月6日までリースを飾り続けます。私の両親はクリスマスチャンではないので、クリスマスが終わると、おそらく年末はお正月のしめ飾りを飾るかと思うのですが、クリスマスチャンとしての私はしめ飾りにはせず、リースを飾り続ける予定です。

このように教会には、クリスマス、すなわちキリストの誕生を祝う日というのがあるのと同時に、特定の長さのある日々を季節のようにして考えることがあります。これを教会暦といいます。教会のカレンダーですね。この教会のカレンダーに従って、いろんな行事があり、また私たちの心の中も、教会中心の生活になっていくわけです。

さて、お話をアドベントに戻しますと、アドベントはクリスマスに備え、キリストの誕生を待ち望む期間だという説明をしました。主イエス・キリストの誕生というクリスマスの出来事を覚え、それを喜び祝うクリスマスに備えるということです。先々週の月曜日、12月1日の夕方には、このフェリスのチャペルの外で、クリスマス・ツリーの点灯式がありました。私は残念ながら行けなかったのですが、その日出席された方は、夜の闇にぱつと光が灯される、とても素敵な体験をされたはずですよ。

このクリスマスの夜に光が灯るという現象、最近は教会だけでなく「イルミネーション」として、街のあちこち、いや、最近では一般の方の家の周りを派手な電飾で飾るということにもなっています。私が20年ほど前にアメリカに住んでいた時などは、あるコミュニティの家全体が競って、家を電飾して光らせていました。こういったイルミネーションをクリスマスの日、友人と車で眺めに

いったことがあります。家が派手に装飾されているだけではありません。庭にはキリストが馬小屋で誕生するシーンをオブジェのようにしたものも置いてありました。日本ではクリスマスというとサンタクロースや雪だるまがメインかもしれませんが、アメリカのオブジェは、圧倒的に幼子イエス・キリストなのですね。そのほか教会というと、クリスマス・イブに行われるキャンドル・サービスを思い起こす方もいらっしゃるかもしれません。

このように、クリスマスというと夜に光を灯すというのが習慣となつていますが、やはりこれは、もともとは救い主であるイエスが、悩みや苦しみによつて闇の中に生きる人間が住む世界に、それは混沌とした闇の中ということだと思つたのですが、まさにこの世界に光の主として誕生されたことを象徴しているのではないかと考えられます。今日の聖書箇所、ルカによる福音書の「羊飼いと天使」の箇所はクリスマスの定番中の定番ですが、夕闇の中に、天使たちがやってきて、神さまの栄光が照らされた様子が描かれています。突然の光を見た羊飼いたちは、さぞかし驚いたことでしょう。しかし天の大軍がさらに、神さまの輝かしいご栄光を表します。神さまへの賛美の言葉「いと高きところには栄光、神にあれ」という言葉は、カトリックのミサや、合唱曲としてもよく歌われる「グロリア」の歌詞のもとになつた箇所でもあります。

そんな神さまへの賛美の声は、羊飼いたちの恐れを吹き飛ばしたかのようです。彼らは「さあ、ベツレヘムへ行こう」と話し合つたといひます。もう羊飼いたちに恐れや迷いはありません。まづすぐに飼ひ葉桶に眠るイエスのもとへと進んでいったのです。

私たちも、この希望に燃えた羊飼いとともに、私たちの心の灯をともし、それをクリスマスその日まで、持ち続けていきたいものです。その希望の光は、すべての人に与えられる喜びだからです。

アドベントのシーズンのこの日、私たちは光の主、イエス・キリストが私たちの救いのためにお生まれになったことを改めて確認し、その喜びをたやさず、信仰をもって、イエスの誕生を祝うクリスマスその日まで、ともに進んでいきましょう。

イエス・キリストの父なる神さま、寒い冬の中、暗闇に包まれる時間が多くなっています。しかし、あなたが私たちに与えてくださる御子は、光の主となつて、この世に、人間として生まれてくださり、私たちに希望を与えてくださっています。どうか私たちも、そのことに信仰をもって応え、感謝を持ち続けられますよう、お導きください。

(二〇二五年十二月一日 緑園)

望んだとおりの人生に

ルカによる福音書 二六〇―三八節

松村 はるか

(キリスト教センター職員)

クリスマスが近づいてまいりました。アドベントクランツも、三本のろうそくに火がともりました。

みなさんは、マリア様と聞いて、どんなイメージをお持ちですか。聖母とあがめられる、清楚で、神さまに守られて幸せな人生を歩んだ女性を思い浮かべるでしょうか。

本日の聖書箇所は、受胎告知と言って、マリア様が天使のお告げを受ける場面です。そして、マリアはそのお告げに従って男の子を生み、その子は全世界を治めるようになります。のちの世では、聖母と讃えられる。こんなに素晴らしい人生はない、と思われるでしょうか。

考えてみますと、マリアの人生は、苦難にあふれたものだったと思います。天使のお告げを聞いたとき、マリアは、伝承では十三歳だったとも十五歳だったともいわれます。当時の地中海世界でその年齢での結婚は珍しいことではありませんでした。しかし、まだ結婚していないマリアが

身ごもるということは、刑に処せられるようなことです。ヨセフに受け入れられ、マリヤは男の子を生みますが、あたたかい部屋もなく、ゆりかごもなく、生まれた子を、飼い葉おけに寝かせるしかありませんでした。イエスと名付けられたその子は、当時のユダヤの世界では受け入れ難い活動を繰り返します。マリヤが息子のイエスを心配する様子は聖書にも描かれています。そして、息子であるイエスは捕えられ、マリヤは、イエスが十字架刑に処せられるところを目の当たりにします。マリヤの人生を、出来事でたどってみますと、こんなに残酷で悲惨な人生はないのではないかと思います。人の目にも、はじめに映ったかもしれません。マリヤの人生は、マリヤが望んだ人生とは、大きくかけ離れていたでしょう。女性として、こんな人生を望む人は、一人もいないと思います。

しかしながら、マリヤの人生を、マリヤの視点を少し離れて考えてみますと、マリヤは、「神さまがマリヤに望んだ人生」を、そのままに生きた女性と言えるでしょう。神さまは、救い主の母として、名もなきマリヤを選び、マリヤは、それを受け入れました。神さまの望んだ人生を受け入れたのですから、まさに、マリヤは「自分が望んだとおりの人生」ではなく、「神さまが望んだとおりの人生」を生きた女性であると言うことができます。

マリヤの身に起こった出来事だけに目を向けますと、マリヤはかなり悲惨な人生を歩んだと言わざるを得ません。幼いマリヤにも、夢や希望があったはずですが、それをすべて手放し、ただ神さまに従いました。なぜ、マリヤがそんなことを受け入れることができたのでしょうか。

今日、皆さんと一緒に考えてみたいのは、マリアが、自分の人生に「どんな出来事が起きることを望んだか」ということではなく、マリアが、「心の奥深いところで、何を望んでいたか」ということです。福音書によりますと、天使ガブリエルが現れ受胎を告げると、マリアは戸惑いながら答えます。「どうして、そんなことがありえましようか」。マリアだって、一も二もなく天使のお告げを受け入れたわけではありません。天使の言葉に促され、マリアは答えます。「私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように。」

マリアのこの言葉は、マリアがよくよく考えて発した言葉というより、天使の促しに従って、咄嗟に口から出た言葉のように感じられます。なぜなら、その後、マリアは親族のエリザベトのところへ行くからです。大きな悩みを抱えたマリアは、家を離れ、信頼できる親族のもとへ行きました。そこで、エリザベトに会い、その祝福の言葉を受けて、救い主である神を喜びたたえます。今日の讚美歌は、その時にマリアが歌ったとされる「マリアの賛歌」です。マリアは、三か月ほどエリザベトと共に過ごしてから、家に戻ります。

さて、先ほどの、マリアの言葉に目を向けてみたいと思います。マリアは言いました。「私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように。」先ほども申しました通り、私には、これはマリアの咄嗟の言葉に聞こえてなりません。しかしながら、私たちが発する咄嗟の言葉は、時として核心をついています。マリアのこの言葉も、マリアの本質を表しているように感じます。

マリアの試練に満ちた人生は、その試練のたびに、マリアをこの言葉に近づけていったように私

には感じられます。新共同訳聖書では、この言葉は「私は主のはしためです」と訳されています。マリアが、主のはしためであることを、主の言葉がそのとおりになることを心底望んだからこそ、マリアの人生に起きた数々の試練は、マリアを、真のマリアに近づけていったのではないのでしょうか。

マリアは、いつも思い巡らせていました。天使が来た時も、イエス誕生の夜も、息子のイエスと
思いが通じ合わない時も、みな心に留めていました。そして、神さまのみ業をただ受け入れました。
マリアの人生は、出来事だけをたどれば、決してマリアの望んだとおりの人生ではなかったはず
です。でも、マリアが心の奥底で、切に願ったことに目を向ければ、マリアほど、望んだとおりの
人生を生きた女性はいないのではないのでしょうか。

主の言葉が、言葉どおりに実現するということは、多くの犠牲を必要とすることかもしれません。
イエスの十字架の苦難を、イエス以上に苦しんだのは、マリアかもしれません。それでもなお、主
の言葉がその身になることを望んだマリアを心に覚えて、祈りを深めたいと思います。

(二〇二五年二月一六日 緑園)

イエス様とつながって生きるということ

豊かに実るために

ヨハネによる福音書 一五章一〜一〇節

松田理奈

(キリスト教センター職員)

年が明け、学期末まであと一ヶ月位。一〜三年生の皆さんは進級に向けて、四年生の皆さんは卒業に向けて、新しい一歩を踏み出そうとしています。期待と同時に、不安や迷いを抱えている方もいるかもしれません。そんな皆さんに、イエスさまが語られた「まことのぶどうの木」のたとえを紹介したいと思います。

今日一月六日は教会の暦では、公現日と呼ばれ、東方の博士たちがベツレヘムに生まれた幼子イエスのもとを訪れたことを記念する日、イエス・キリストが神の子として公に世に現れたことを記念する日です。教会では一二月二五日からこの日までクリスマス（降誕節）のお祝いをします。この日を境に公現節と言って、イエス様が何者であるか？ということに重きをおいて過ごす期節が

始まります。イエス様は洗礼者ヨハネから洗礼を受け、様々な奇跡を起こしながら、宣教活動に入るのです。今年のイースターは四月五日ですが、その四〇日前には、またイースターへの準備期間に入ります。

今日拝読しました聖書箇所は、最後の晩餐で、イエス様を裏切ることになるユダが去った後、イエス様が弟子たちに語る場面です。自分の死を予告して、残されることになる弟子たちに「わたしはまことのおどりの木、私の父は農夫である。私につながっている枝で実を結ばないものはみな、父が取り除き、実を結ぶものはみな、もつと豊かに実を結ぶように手入れをなさる。」「父が私を愛されたように、私もあなたがたを愛した。私の愛にとどまりなさい。」「今日はその続きを拝読しませんでした。」「私があなたがたを愛したように互いに愛し合いなさい。これが私の戒めである。友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」弟子たちのことを「友である。」「もはや僕（しもべ）とは呼ばない」と続いています。

日本聖公会の司祭である相澤牧人先生が説教集でとても分かりやすく解説して下さっていますので紹介しますと、イエスさまが言われた、「つながっている枝で実を結ばない」状態は、不完全な信仰、未熟な信仰を指しています。この時、父である神様は、もつと実を結ぶように、手入れをなさるのです。剪定するということです。ある解釈では、この時の「取り除く」とは切り捨てられてしまうのではなく、原語の「アイロー」は「持ち上げる」、「取り上げる」ということなのだそう。ぶどうの木は生えたばかりの枝はそのままにしておく垂れ下がり、地面に沿って伸び

ていつてしまうので、葉が土にまみれて泥だらけになって、病気になったりして、実を結ばないのだそうです。なので、父である農夫が、その枝を持ち上げて、良く洗い、つる棚に巻き付ける。そうすると元気に育つのだそうです。つまり、困難にぶつかっても神様は枝を持ち上げて、再び元気になるように、手助けをして、実を結ぶようにしてくださいということです。これはとてもありがたい救いではないでしょうか？そして「実を結ぶものは、もつと豊かに実を結ぶように」してくださいのです。

余談ですが、このお話を考えている年末年始に、小学生の息子がKANの『愛は勝つ』を歌っていました。「心配ないからね 君の想いが 誰かにとどく 明日がきつとある」「どんなに困難でくじけそうでも 信じることさ 必ず最後に愛は勝つ」。一九九〇年のヒットソングですが、年末の歌番組のエンディングで出演者の皆が歌う応援ソングとして歌い継がれています。友人の恋愛相談から生まれた歌だそうです、この歌詞の内容は自己中心的なエロスの愛ではなく、見返りを求めない、与え続けるアガペーの愛だから、万人受けするのだらうと思います。数年前に亡くなったKANはクリスチャンではなかったものの、少年時代、毎週日曜日バプテスト教会に通って賛美歌を歌っていたそうです。きっとそこで聖書を読んだり、聞いたたり、牧師さんのお話も聞いたことでしょう。「求めてうばわれて与えてうらぎられ 愛は育つもの」という歌詞の中に十字架にかかるイエス様と重なって見えると仰る牧師さんがいらっしやいました。全ての人々に裏切られ、十字架にかかる前夜においても弟子たちには「互いに愛し合いなさい」ということを命じました。『愛

は勝つ』の歌の中にキリスト教の愛との共通点を見出しつつ、息子の歌声を聞きながら、この「まことのぶどうの木」のお話の原稿を考えていました。

少し話が逸れましたが、イエス様が神様である父から遣わされて、この世に生まれ、亡くなる前に弟子たちに伝えたかったこと―「まことのぶどうの木であるイエス様につながる」という状態は、一回限りでも一時的でもなく、日々ずっと連続して続いていることです。つながっている状態なら、困難にぶつかっても、神様は見放すことなく、手を差し伸べてくださるのです。でもここには条件があり、「イエス様が愛したように互いに愛し合う」ということが必要になってきます。イエス様は貧しい人、孤独な人、障がい者、社会的弱者に寄り添って愛を惜しみなく注いで生きておられました。互いに愛し合う中に本当の救いがあるのだと教えてくださっています。一方的ではなく、自己中心的でもなく、一時的でもない、神様につながれて、互いに大切にしながら生きていく時、平和が実現し、救いが実現します。そして「あなたがたが私につながっており、私の言葉があなたがたの内にとどまっているならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」ということにつながり、もつともつと、豊かに実がなっていくます。どこに本当の価値があるのか、命がどんなに尊いものなのか、互いに愛することがどれほど大切なのか、人が人として生きていくことの意味を、イエス様につながることでよって理解していくことができるのです。私は、この解釈にとっても感銘を受けました。

大学生生活を終えようとしている四年生の皆さんは、これから、自分の力で生きていく段階に入

ります。社会はしばしば、成果や能力、効率や結果で人を評価します。どれだけ実を結んだかが問われる世界です。しかし、イエス様は、まず「実」よりも「どこにつながっているか」を大切にされました。自分の価値を成果だけで測り始めると、失敗した時、自分自身を否定したり、見失ったりしてしまいます。イエス様につながるとは、「あなたは、失敗しても、愛されている存在だ」という土台に立って、希望を持って生きることです。皆さんのこれからの人生にも、思い通りにいかないこと、遠回り、挫折があるでしょう。しかし、それは、価値がないからではなく、より深く、より豊かな実を結ぶための時かもしれません。実を結ぶ人生とは、成功の数を増やすことではなく、誰かを思いやり、誰かの重荷を分かち合い、小さくても確かな愛を残していくことです。どうか皆さんが、不安な時も、迷う時も、「自分は独りではない」「神様はいつも見守っている」ということを忘れずに歩んでいかれますように。ぶどうの枝が静かに実を結ぶように、皆さんが神様から与えられた賜物に感謝しつつ、一人ひとりの人生が、愛と希望の実を結ぶことを心から願っています。

(二〇二六年一月六日 緑園)

「変える」ということ

マルコによる福音書 二章二三―二八節

小檜山 ルイ

(学長)

2024年の4月に私は本学に着任しました。その2年前、私は、理事会の下に作られた大学の改革委員会の委員長になり、再建プランを考えていました。今の1学部3学科9専攻体制の原案は、その委員会で私が提出したものです。その時は、他に良い案があれば、そちらにしてください、といったごく軽い気持ちで出したのです。しかし、その案は採択され、具体化に向けて大学が動き出しました。その時、私は別の大学に勤めていたので、具体化のプロセスには関わりませんでした。代わりに、理事会のもとに作られた人事委員会の委員長に指名され、いくつかの案件を承認したりしました。本務の傍で、これらの仕事を引き受けたのは、私がフェリス中高の卒業生として、フェリスに特別な思いを持っていたからです。

それで、学長職も引き受けることにしました。理事会の推薦で、本学が初めて学外から迎えた、初めての女性の学長としてです。パラシュートで外からやってきたので、大学の教職員に知り合い

はとても少なく、実に心細い状況でした。それに、私の認識としては、私は何かを「変える」ために登用されたのです。それは難しい仕事だと予想できませんでした。ただ、未来を開くためには、今まで通りにやっているのでは足りない、という危機感が私にはありましたし、理事会の一部にも共有されていたと思います。

着任して驚いたのは、フェリスが想像以上に閉鎖的で、孤立していて、自分たちの中だけでの平和を追い求めてきた、ということでした。コロナの影響もあつたと思いますが、それ以前からその傾向があつたようでした。それで「開かれたフェリス」を掲げて、積極的に学外の会合に出て、人間関係を広げ、情報を得、機会があれば、関係を取り結ぼうとしました。外から声かけがあつたら、素早く反応し、要望にはできるだけだけ応えていくことを心がけました。一言で言うと、外からの力でまず本学に変化を呼び込もうとしました。今も継続しています。

同時に本学の「決まり事」も変えていかなければならないと思いました。色々あるのですが、キリスト教の表現の仕方も改革の重要な部分だと私は思っています。

着任して、まず取り掛かったのは、日曜日の問題です。入試関連の学事以外で、日曜日にキャンパスを使ってはいけないというルールが本学にあります。日曜日は聖日だからです。かつて、ニューヨークでもデパートが日曜日休業している時代がありました。今は変わってきましたが。とにかく、そのために学会を本学で開くことができないのです。学会は、ここ4半世紀、そのほとんどが土日に開かれるようになりました。昔のように休講を簡単にすることができないからです。

大学は教育機関であるとともに、研究機関です。その大学で、日曜日は安息日だという理由で、学会を開催できないなんて、私には信じられませんでした。私が卒業したICUでも、前任校の東京女子大学でも、両方ともキリスト教主義の大学ですが、そんなルールはありませんでした。実際、私は、東女で少なくとも4回、学会の大会を主催しました。そのほとんどが日曜日を含んでいました。

2024年に着任した直後に、ちょうど、ある先生から、2025年10月に国際ジェンダー学会の年次大会をフェリスで開きたいというお話がありました。土日の開催です。私は、何としてもこれを本学で開きたいと思いました。学院に掛け合うと、あっさり拒否されました。そこで、学外の会合でキリスト教主義の大学の学長に会うと、日曜日に学会が開けるか聞いて回るようになります。開けた範囲で、開けない大学はありませんでした。同時に、機会があるごとにこの案件を持ち出し、執拗に開催の許可をお願いしました。色々ありました。結果、「例外として」開催を認めていただき、昨年10月に国際ジェンダー学会はフェリス女学院大学で無事開催されました。大好評でした。

大会運営に関わった先生方の努力に感謝しています。大会の主催は、学会を支える重要な仕事で、すべては、学会員の奉仕として行われます。いわば、本学に所属する教員は実に久しぶりに、その奉仕、義務を果たせたわけです。逆に言えば、学会を持ってこれない大学など、研究機関として認められないと私は思っています。また、学会開催は、開催校の大学院生や学生が学問上

の交流に直接触れる機会になります。アルバイトとして運営を手伝え、会議運営のノウハウを習得することにもつながります。そして、全国の大学教員や大学院生がキャンパスを訪れることで、開催校に対する一般的認知を高めることもできます。

今、国際ジェンダー学会を例外に止めるのではなく、一般的に日曜日に学会が開けるようにするプロセスを進めようとしています。国際ジェンダー学会の成功のおかげで、そのプロセスは多分、順調に進んでいくと期待しています。今年の4月までに、きちんと規約が改定されると仮定すると、実に問題を取り上げてから2年間かかったことになります。改革のスピードが遅すぎるのが、学長としての私の悩みの一つです。

とにかく、この間、私を支えたのは、冒頭に読んでいただいたイエスの言葉でした。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」新約聖書に登場するイエスは、しばしば「ファリサイ派の人々」と対立しています。ファリサイ派とは、単純化して言うなら律法主義者です。律法主義者とは、当時、ユダヤ教の律法（規則）に通じていて、その定めを何よりも重んじて生きた、信仰深い人たちです。いわば、尊敬されていた人たちなのです。しかし、律法を重んじるあまり、それさえ守っていれば良い、安心と言う訳で、その信仰はしばしば形骸化していました。イエスは、規則に囚われず、その時々々の必要に応じて判断し、行動しました。無_論論、この部分の最後に、「だから、人の子は安息日の主でもある」とあるように、イエスは神の子、特別な存在ということで、彼の判断は、絶対正義として提示されています。安息日に何をし、何を

してはいけなさを決める権力をイエスは持つていたわけです。神の権力をイエスが主張したので、フアリサイ派の人々にとって、イエスは許されない存在になっていきました。

言うまでもなく、普通の人間は、イエスのような権力を主張して、すでにある規則を批判できません。でも、常に問うことをやめてはいけなさいではないでしょうか。神と人との関係には、業と恩寵という二つの側面があります。業の契約は、いわば律法主義で、決められたことをきっちり守ることを求めます。一方、恩寵の契約は、人間に与えられた律法を飛び越えて、神が赦しを与えることを約束します。極端にいうなら、この世で、生涯を犯罪者として過ごしても、最期に神が恩寵を与え、赦すことはある。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」はこの命題を扱っています。その意味で、キリスト教において、律法は絶対正義ではありません。逆にいうと、律法だけを守って安心していると、地獄行きもあり得るのです。だから、ある状況において、律法の妥当性を常に問う姿勢を持つことが、私たちにできる最大限の努力だと、私は考えています。律法と状況は緊密な関係にある。律法が状況を支配するのでも、状況が律法を支配するのでもない。人はその間にあって、常に最善の解を求めて問うことを続けなければいけなさいと、私はイエスの言葉から学んでいます。

(二〇二六年一月二三日 緑園)

「クリスマスのプレゼント」

マタイによる福音書 二章一一節

関 智 征

(本学非常勤講師)

「なぜ一月も半ばになって、クリスマスの讚美歌を歌うのだらう」そのように感じられた方もおられるかもしれません。しかし、教会の暦では、クリスマスはまだ終わっていません。教会は今も、クリスマスの出来事を静かに味わい続けています。

一月六日は、公現日(エピファニー)と呼ばれる日でした。これは、イエス・キリストがユダヤ人だけでなく、すべての民に公に現れたことを記念する日です。東方の博士たちが幼子イエスを訪ね、礼拝し、贈り物をささげた出来事が、この日の中心にあります。

博士たちがささげた贈り物は、“黄金、乳香、没薬”の三つでした。黄金は王の象徴です。イエス・キリストは「王の王、主の主」と呼ばれるお方です。その誕生を祝うにふさわしいプレゼントでした。乳香は、旧約聖書において神にのみ献げられる礼拝用の香であり、この赤ん坊が神に属する存在、祭司的役割を担うお方であることを示していました。その香が立ちのぼる姿から、後に祈

りの象徴としても理解されてきました。そして没薬は、防腐剤として用いられ、死と深く結びついた香料でした。

興味深いことに、乳香と没薬はいずれも、鎮痛作用をもつ薬でもあります。赤ん坊を産んだ直後の母マリアは、長旅の疲れもあり、心身ともに深く傷んでいました。博士たちの贈り物は、単なる象徴的な意味だけでなく、現実の生活と身体の痛みに寄り添う、きわめて実用的なプレゼントでもあったのです。

黄金は、生活を支えるために必要なものでした。乳香と没薬は、痛みを和らげるためのものでした。神の救いは、決して抽象的な理念ではありません。人間の現実の痛み、疲労、不安、生活の重さに、具体的に触れてくるものです。クリスマスの出来事は、そのことを静かに物語っています。キリスト教はしばしば「言葉の宗教」と言われます。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」。人生は、どのような言葉と出会うかによって、大きく形づくられていきます。それは聖書の言葉に限りません。歌の一節、映画の一場面、本の一行、あるいは誰かからかけられた一言が、人生を支える言葉になることもあります。

私たちの心は、放っておくと、否定的な言葉や不安な思いで満たされてしまいがちです。人と自分を比べ、自分だけめなものではないか、と思いつめてしまうこともあります。テストや就活、卒論のプレッシャーで将来が不安だ、という方もいるかもしれません。前を向きたいのに、変えられない過去に縛られてしまふ、という方もいるでしょう。だからこそ、意識して、励ましの言葉、

希望の言葉を心の中に満たしていくことが大切です。

聖書には、そのような言葉が数多く記されています。「明日のことは心配しない（ドント・ウオーリ）」「神は、神を愛する者のために、すべてのことを益（プラス）としてくださる」。これらの言葉は、二千年、三千年という時を超えて、人々の心を支え続けてきました。

東方の博士たちは、贈り物を携えて幼子イエスのもとを訪れました。しかし実は、彼らこそが、最大のプレゼントを受け取った人たちでした。それは、救い主イエス・キリストとの出会いです。彼らの人生が、その瞬間に劇的に変わったわけではありません。しかし、聖書は彼らが「別の道」を通じて帰っていったと記しています。イエスとの出会いは、人の人生の方向を、静かに、しかし確かに変えていきます。

イエス・キリストは「私は世の光である」と言われました。その光は、派手なイルミネーションのようなものではありません。見逃してしまいそうな、小さな光です。しかしその光は、今も一人ひとりの人生の道を照らしています。

神からのクリスマスプレゼントとは、イエス・キリストご自身です。このプレゼントは、クリスマスの日だけのものではありません。今日も、そしてこれから、私たちの人生のただ中に、静かに、しかし確かに届けられ続けています。

かれは／私は／あなたは（何を）

マルコによる福音書 一〇章四六～五二節

星野 薫
(事務局長)

この物語に出てくるのは一人の盲人です。名前はバルティマイといいます。彼は物乞いでした。人々から憐れみを受け、少しばかりのお金を恵んでもらってその日その日の暮らしを立てていた人です。この時代、盲人であるということは単に目が見えないというだけに留まりません。それは憐れみと差別の対象であり、社会から排除された存在でした。この人もまたそのような現実の中に生きていたのです。しかし、主イエスはこの男をかけがえないひとりの人としてご覧になり、彼が抱える問題に向き合い、さらに彼を用いようとされます。

その出来事は、ある日「ナザレのイエスだ」という声がバルティマイの耳に届いたことから始まります。大勢の人が主イエスと一緒にいました。もちろん彼は群衆の姿を見ることができません。しかし、人々の足音や声が耳に届き、状況を正確に理解できたでしょう。そして「ナザレのイエスがお通じだ」という声が聞こえました。するとバルティマイは「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでくださ

い」と呼び始めました。この叫びは、そこにいた人々にはどのように響いたでしょうか。物乞いをしていた人です。お金が目当てだと思われ、偉い先生の前で何とということかと不快感を覚えた人が多かったに違いありません。それで人々は彼を叱りつけ、声を上げることがやめさせようとしてきました。しかし、バルティマイはますます声を上げて「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けます。

主イエスはバルティマイの声を聞くと立ち止まり、彼を呼ぶようにと命じました。そして、バルティマイが目の前に来ると彼に問いかけます。「何をしてほしいのか」——。主イエスは願うことを自らの言葉で求めるよう促します。バルティマイはためらうことなく主イエスの問いに答えました。「先生、また見えるようになることです」。彼は生まれつきの盲人だったのではなく、病気になるいはけがのために視力を失ったようです。

ここで一つの疑問が浮かび上がります。なぜ主イエスが自分を見えるようにしてくださると彼は思ったのでしょうか。マルコによる福音書には、少し前の八章にも盲人の癒しの物語が記されています。バルティマイはその話を知っていて、自分も目が見えるようになりたいと願ったのでしょうか。しかし、その盲人の癒しはベトサイダという場所での出来事でした。イスラエルの北の方です。一〇章のエリコとは地理的に大きく離れていて、一二〇キロメートル以上もあります。それに対してエリコはエルサレムに近い場所です。バルティマイが、遠くベトサイダでの出来事を知っていた

可能性は低いでしよう。物語としてもそういう設定ではありません。

この話がマルコによる福音書の中でどこに位置しているのかを考えると、なぜこの時、この場所だったのがわかってくるように思います。この箇所のお話の後、一章の冒頭には主イエスの一行がエルサレムに入るといふ記事が続きます。そして、さらに続いて主が十字架につけられる受難へとつながっていくのです。また、エリコという町はエルサレムに近い距離にあります。つまりバルテイマイの癒しの物語は、主イエスがエルサレムに入って十字架につけられるその出来事の時間的にも地理的にも直前という位置に置かれているのです。

主イエスがバルテイマイの目を開かれたのがこの時であったことの意味は何でしょうか。彼は何のために見えるようにされたのでしょうか。「イエスは言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った」と記されています。イエスに従って行った先で、見えるようになったその目で、バルテイマイは何を見ることになるのでしょうか。それは十字架につけられた主イエスの姿だたのではないのでしょうか。彼は主イエスが捕らえられ、嘲られ、むち打たれ、そして十字架につけられる姿を、その開かれた目で見ることになったはずで、そして、その出来事を通して、主イエスが私たち罪人のためにいかに計り知れない愛をもってご自身をささげられたかを目撃し、誰よりもはっきりと理解し、体験した証人となったのではないのでしょうか。

この男の名前が福音書に記されていることに注目したいと思います。福音書の中で主イエスに癒してもらった人は多くいますが、名前が記されている人は必ずしも多くありません。ペトサイダで見えるようにしてもらった人の名前は書かれていません。しかし、バルティマイの名前は残されました。ティマイという父親の名前まで書かれています。これはマルコやマルコの教会の人たちにとって、バルティマイがよく知られた人物だったことを示唆しています。彼は主イエスによって目が見えるようにされ、主の十字架の出来事を目撃した後、受難と贖いを証しする生きた証人として人々の前で繰り返し語ったのではないのでしょうか。「あなたの信仰があなたを救った」という主イエスの言葉が、バルティマイの中で現実のものとなったのです。彼は信仰によって救われ、そして主の十字架の真実を見た者として、初期の教会において福音を証しする役割を担ったのではないかと推測されます。

使徒パウロはガラテヤの信徒への手紙でこのように語っています。「ああ、愚かなガラテヤの人たち、十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前にはっきりと示されたのに、誰があなたがたを惑わしたのか」(三・二)。この「目の前にはっきりと示された」という言葉は、実際に十字架の出来事を見た人だけでなく、伝えられた御言葉によってキリストの十字架がはっきりと示された私たち一人ひとりにも当てはまります。

さて、私自身のことになりますが、あと二か月、今年の三月末で退職します。大学を卒業して

すぐにフェリスの職員になりました。一九八二年のことです。それから数えて四四年間、フェリスの職員として勤務しました。フェリスは今年、創立から一五六年なので、フェリスの歴史の二八％くらいを経験したことになります。現代の社会ではキャリアアップのために次の職場に移るといふのは当たり前になっているので、同じ職場に長く勤めること自体に価値があるわけではありません。また、四四年と言っても、私が見てきたことは自分の周りの狭い範囲のことであつたと思います。しかし、フェリスでの仕事を通じて目撃したことが今の私を生かしています。

この物語のバルティマイが目撃し、証した十字架の出来事——そこから始まった新しい歴史は今のフェリスにつながっています。「目の前に、はっきりと示された」キリストの姿を証しする人が立てられ、そのような人々によってフェリスが始まりました。そして、やはりキリストの姿を証しする多くの人々によってフェリスの歴史が受け継がれてきました。私が目撃したのもこのフェリスという学校が人の力を超えて導かれ、そうだからこそ多くの人々がクリスチャンかどうかにかかわらずフェリスのために力を尽くしてきた姿であつたと思います。

学生の皆さんはフェリスの何を目撃し、何を語り継いでいくのでしょうか。皆さんがこのキャンパスで学び、経験したこと、それが一人一人を生かしているのではないかと思います。その一人一人の歩みが足跡として残されることによって、フェリスという学校がどういふところなのかを物語っています。授業やクラブ活動、友人との関わり、さまざまな出来事の中で見たこと、聞いたこと、

感じたこと、時に傷つき、悩み、考え、行動することを通して、皆さん自身の物語を作っていきます。それは単なる時間の積み重ねではなく、一人ひとりの人生そのものを形成し、それは共に歩む誰かの人生につながり、そしてこの学校の歴史につながる足跡になります。

特別な力や立場がある人だけが、重要な瞬間を目撃するわけではありません。バルティマイのように社会の隅にいるような人であっても声を上げ、歩み続けることで、目の前で起きる大切な出来事に立ち会うということが起こりました。彼はその出来事を語り続ける証人となりました。その証言は次の世代に語り継がれていきました。私たち一人ひとりも毎日の生活の中で大切な何かを目撃した者として、それぞれの場所へと遣わされていきます。主に導かれて歩むその道の上で、何を見、何を語り継ぐのか——ここにいる私たち一人ひとりに委ねられています。

(二〇二六年一月二三日 緑園)

6/2-6/6	ペンテコステ/ 世界の人々と 共に生きる	説教者 タイトル	音楽の礼拝 ペンテコステの オルガン音楽	松村はるか ただ、お言葉を ください	本学生 わたしをお抱ください 〜マナー・マナーの祈り〜	秋岡 陽 来たら聖霊よ	金井美彦 聖霊の降臨 一ひたりひりが 神とつながる	荒井 真 違いを認めて 共に生きる
6/9-6/13	ペンテコステ/ 世界の人々と 共に生きる	説教者	秋岡 陽	相澤 一	音楽の礼拝	キリスト教講演会	キリスト教講演会	秋岡 陽
		タイトル	聖霊が降る	霊についての真面目な 話	ザクザクによる クラッシュの礼拝 音楽の礼拝			
6/16-6/20	環境/日本につ いて	説教者	松村はるか	音楽の礼拝	本学生	秋岡 陽	次郎丸智希 あこがれを 知るだけが	松本奈穂子 サワロの回心
		タイトル	平和を歌おう① 〜マナー・マナーの 祈り〜	三位一体	ソノネのバラ記念礼拝	創造と環境	天の法則	
6/23-6/27	環境/日本につ いて	説教者	秋岡 陽	松村はるか	相澤 一	音楽の礼拝	三浦はつみ 神の息よ	荒井 真 環境破壊とキリスト教
6/30-7/4	余は如何にして 基督を信じたか と 愛するということ	説教者	末松茂敏	松村はるか	平は聖霊が神が 手に入らばどう有利	音楽を通して祈りを ささげよう	秋岡 陽	松田理奈 間 智征
		タイトル	教会との関わり	愛しきつて何だろう	ちよと待て、 神は愛なり	ちよと待て、 神は愛なり	平和を歌おう③	有坂美香 恐れな
7/7-7/11	余は如何にして 基督を信じたか と 愛するということ	説教者	秋岡 陽	松田理奈	阪野真緒子	愛するということ	本学生	松本奈穂子 ゴスペルに親しもう
		タイトル	余は如何にして 基督を信じたか	愛するということ	神さまの時	音楽礼拝	三浦はつみ	松本奈穂子 私たちの国籍
7/14-7/18	差別と闘う/ 平和	説教者	アジアカン 〜繋がる〜	神のまことは	新しい布どう 酒は新しい布敷に	口短調ミサ曲より	父・子・聖霊	私たちの国籍
7/21-7/25	差別と闘う/ 平和	説教者	秋岡 陽	本学生	相澤 一	阪野真緒子	松村はるか	荒井 真 ハンセン病差別を 知っていますか?
		タイトル	平和を造る人々は、 幸いである	「主の平和」が もたらす未来	キリストは私の平和	神さまの時	宗教で何だろう	

日付	週間テーマ		月 (献詞)	火 (献詞)	水 (献詞)	木 (山手)	木 (献詞)	金 (献詞)
9/22~9/26	信じるということ と、私の推しの一冊	説教者 クイトル	音楽の礼拝 平和を祈ろう	松村はるか 「イエス様のだとえ話を 読む(1)たとえ」 「友を訪はる人(1)たとえ」	牧岡 陽 「キリスト者の自由」	相澤 一 「聖書に学ぶ 「終つた」と感じる」	松村はるか 「御河真道の夜」 朗読：次郎丸智希	相澤 一 聖書に学ぶ 「聖書を通して」 「終つた」と感じる
9/29~10/3	信じるということ と、私の推しの一冊	説教者 クイトル	「信仰業認を興隆で 表現すること」 ～「クワラトの道徳」 ～「トムエロヤン聖書」 (2002年)によせて～	「聖書」を読む	講義第21-484 主われを愛す	「聖書」を読む	松田理奈	私の推しの一冊 「権名蘭三 「私の聖書物語」」
10/6~ 10/10	クローバール時代 を生きたる/私た ちの未来	説教者 クイトル	松村はるか	相澤 一	牧岡 陽	松田理奈	松村はるか	松村はるか
10/13~ 10/17	クローバール時代 を生きたる/私た ちの未来	説教者 クイトル	「イエス様のだとえ話を 読む(3)たとえ」 ～「クワラトのだとえ」 ～才能を生かすために～ ～謙遜さうて祈らう～	松村はるか	愛する主イエスよ 我らここに集いて	「聖書」を読む ～「エルタとマリア」 奉唱：西田起子	「聖書」を読む ～「エルタとマリア」 奉唱：西田起子	人の言葉に 俯つたとき
10/20~ 10/24	宗教改革/学ぶ ということ	説教者 クイトル	松村はるか	新倉久乃	松村はるか	音楽の礼拝	松田理奈	松村はるか
10/27~ 10/31	宗教改革/学ぶ ということ	説教者 クイトル	ルターの大衆歌	祈るときには ～祈りせらじと一より～	キリスト・イエスに学ぶ 「For Others」	相澤 一	「イエス様のだとえ話を 読む(5)たとえ」 「權を問へ人」	「キリスト者の自由」
11/3~11/7	人間と人間を 結ぶ絆/DI1	説教者 クイトル	川口葉子	あなたは私の愛する子	キリスト教講義会 (3期)	相澤 一	「ハロウインソングで ハロウソクと関係ある の？」	人間と人間を結ぶ絆
11/10~ 11/14	人間と人間を 結ぶ絆/DI1	説教者 クイトル	いちばん偉い人	「いなかになった息子」 ～父の愛は不公平～	牧岡 陽	松田理奈	松村はるか	人間と人間を結ぶ絆
								アンネのバラ樹園記念 礼拝

11/17～ 11/21	人間と人間を 結ぶ絆/DEI	説教者 クイトル	松田理奈 平安と謙ち足りた心が 必要なきとき ～「信心を求めて」より～	秋岡 陽	雑やかなるときも 神めるときも……	音楽の礼拝 パソハと その弟子クレバス	本学学生 あなたは神の子 キリスト	松村はるか 賛美歌に纏じもう① 胸いとおおむす上 奉唱：聖歌隊Musica sacra有志	磯平尚子 見えないうものに目をと める
11/24～ 11/28	SDGs/食と環境	説教者	秋岡 陽	相澤 一		相澤 一	相澤 一	相澤 一	相澤 一
		クイトル	神のなさされることは 皆その時にならって美しい	「大地讃頌」の前に	街角でキリストに出会う		日給聖事を感もう② 天地創造・エデンの園 朗読：本学学生 荒井 真 松村はるか		
12/1～12/5	SDGs/食と環境	説教者	本学学生	松村はるか	松村はるか	音楽の礼拝	松田理奈 クリスマス の黄義歌を感もう③ クリスマス の黄義歌を感もう③ 奉唱：聖歌隊Musica sacra有志	松田理奈 クリスマスとはなにか ～「神のなかで光の主を 待つ～」	相澤 一
12/8～ 12/12	アドベント/ クリスマス	説教者	松村はるか	相澤 一	秋岡 陽	クリスマス礼拝	クリスマス礼拝 クリスマス礼拝	クリスマス礼拝 クリスマス礼拝	荒井 真 「羊飼いたちへの グッド・ニュース」
		クイトル	さあ、ベツレヘムへ 行こう	本当にキリストは 生まれたのか？	今来てくたさい、 真邦人の救い主よ		深い闇の最中に きらめく星 奉唱：聖歌隊Musica sacra有志		本学学生
12/15～ 12/19	アドベント/ クリスマス	クイトル	闇から光が	望んだとおりの人生に	アドベント=思い巡らし 折る時	音楽の礼拝	音楽の礼拝		「一粒の麦」
12/22～ 12/26	アドベント/ クリスマス	説教者	音楽の礼拝	冬期休業	冬期休業	冬期休業	冬期休業	冬期休業	冬期休業
		クイトル	クリスマス奉養：聖地理想 バオロウ奉養	松村はるか	本学学生		音楽の礼拝 クリスマス の黄義歌	音楽の礼拝 クリスマス の黄義歌	相澤 一
1/5～1/9	アドベント/ クリスマス	説教者	松村はるか	松田理奈	本学学生	冬期休業	冬期休業	冬期休業	相澤 一
		クイトル	不思議な星に導かれて ～豊かに生きるために～	イエスさまよつながら ～豊かに生きるために～	大学生活を振り返って 音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	歩き続ける (新年にあたり)
1/12～1/16	アドベント/ クリスマス	説教者 クイトル	成人の日	小樽山ルイ	音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	入構禁止
1/19～1/23	アドベント/ クリスマス	説教者	本学学生	土屋広次郎	本学学生	音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	星野薫
		クイトル	自分を救うために	Amazon Graceを 英語で歌おう	星と音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	音楽の礼拝	かれば/私は/ あなたは何を)

あとがき

山本弘のSF小説『去年はいい年になるだろう』は、悲惨な事故や災害を防ぐため、二四世紀からアンドロイドたちがタイムマシンでやってくる…という場面から始まります。そして彼らは、過去を改変し、いろいろな事故や事件を未然に防ぎます。詳しくは実際にお読みいただきたいのですが（ラストは本当に衝撃です）、二〇二五年もいろいろなことがありました。「去年もくくやくくなど、悲惨な事故や事件や災害がたくさんありました」というのは、もはや去年を語る際の決まり文句となっています。

一方、みなさんは、ご自分の二〇二五年を振り返って、改変できるなら改変したいことがあったでしょうか？「こうすればよかった、ああしなければよかった」「こうだったらよかったのに、ああじゃなければよかったのに」ということが何かありましたでしょうか？ そうしたことが全くない人は一人もおられないでしょう。中には、そうしたことが頭を占め、失敗した場面を脳内でリピート再生しながら後悔の毎日を送る人もいます。

しかし、私たちの救いは、過去改変によってもたらされるのでしょうか？「自分はあの過去さえ改変すれば、今が変わって救われる」と考える人もおられるでしょう。しかし優れたSF小説は、改変の結果やってきた別の未来がより絶望的であったり、まだ足りないとはかりに改変し続け、

整形手術依存症のようになったりと、決して「めでたしめでたし」にならないことを予言しています。

本書は、二〇二五年度に行われたチャペルサービスのメッセージの記録です。二〇二五年度は、新しい形のチャペルサービスに取り組んだり、新しい奉仕者が与えられたりで、去年までよりも多くの方たちにご寄稿いただいております。

本書を読むことで、二〇二五年度のチャペルサービス全体を振り返ることができませんが、一読しておわかりいただけますように、全体を流れているトーンは、決して「ああすればよかった、こうすればよかった」という後悔や悔悟ではなく、讚美と感謝です。もちろん、クリスチャンだからといって、悲しいことや嫌だったこと、失敗したことなどが全くなかったはずはありません。しかし、だからといって、過去改変を祈り求めているわけでもありません。後悔や悔悟はもちろんありませんが、それらに飲み込まれることのない感謝と讚美が輝き出ていることを、読者のみなさんは感じ取られることでしょう。そして、チャペルサービスというのは、まさにそういう時間なのです。

本書は、今年度より「アンダハテン」から、「For Others」という名称に変わり、形態も紙媒体から電子媒体(PDF)に変わります。先に書いたとおり、新しいチャペルサービスの形態もいろいろチャレンジされましたし、新しい奉仕者も与えられました。多くの変化があったわけですが、後で振り返って「やめておけばよかった」「失敗だった」となることも、あるいはあるのかもしれない

ません。しかし、今後、時代も世界も大学も、そしてその中でチャペルサービスも変わっていく中で、「時が良くても悪くても」(二モテ四章二節)、後悔に飲み込まれることなく、讚美と感謝が輝き出る時間として、チャペルサービスの時が持たれ続けていきますことを、心よりお祈りいたします。

宗教主事・グローバル教養学部心理コミュニケーション学科教授

相澤

一

2025年度
チャペルサービスメッセージ集
—— For Others —— 第44号

2026年3月6日 発行

発行 フェリス女学院大学 キリスト教センター
〒245-8650 横浜市泉区緑園4-5-3
印刷 フェリス女学院 ドキュメントセンター
